2016年度博士論文

中年期の人が望む老後像に関する研究
－質的研究と量的研究を用いて－

桜美林大学大学院

松永　博子

目次

1. 緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
1)本研究の目的と背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2)先行研究の到達点と解明すべき課題・・・・・・・・・・・・・・・・・2
3)本研究で解明すること・・・・・・・・・ ・・・・・・・・・・・・・ 6
2. 研究1 中年期の人の望む老後像の解明・・・・・・・・・・・・・・・・6
1)目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2)方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3)結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
4)考察・・・・・・・・・・・・・・・ ・・・・・・・・・・・・・・14
5)研究の限界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
3. 研究2 中年期の人の望む老後像に関する質問項目の作成と望む老後像 16
1)目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
2)方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
3)結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
4)考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
5)研究の限界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
4. 研究3 中年期の人の望む老後像に関連する要因の解明・・・・・・・・24
1) 目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
2) 分析モデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
3) 方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
4) 結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
5) 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
6) 研究の限界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
5. 総合的考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
1) 本研究で解明した課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
2) 中年期における老後像研究の新しい展開の可能性・・・・・・・・・ 30
3) 老年学におけるライフコースの視点の導入・・・・・・・・・・・・ 32
6. 本研究の総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i

1. 緒言

1)本研究の目的と背景

我が国の人々の寿命は急速に延び、2015年の平均寿命は男性80.79歳、女性87.05歳となった（厚生労働省HP Dec.02,2016）。その数値は、かつて人々の望んだ「長寿」の実現を示すものであり、現在中年期にある人々にとっては、自身が子供の頃想定していたよりも長い高齢期を過ごす事を示している。ところが、日本の現状を見ると、バブル景気以降それまでの終身雇用制度は崩壊し（NIRA HP Dec.25,2016）、介護保険制度の施行、後期高齢者医療制度の開始、漸次的な老齢年金支給開始年齢の引き上げ（厚生労働省HP Mar.14,2016）など、これまでの中年期から高齢期への制度的な枠組みは大きく変更され、この先も不確かな状態である。

このような状況の中で、高齢期に至るまでに、高齢期の健康と経済的基盤はもちろんの事、高齢期にどのような生活を送るのかを考える事の重要性は増してきていると思われる。そのためには、次のような課題の探求が必要となる。それは、いつごろから自分が目指す老後像を考え始めるのか、その望む老後像はどのように変化するのか、そして、最終的に達成される高齢期の生活とどの程度一致しているのかである。このような課題に関する研究蓄積は後述のように乏しく、これらを一つの研究で明らかにするのは容易ではない。そこで、本研究ではその最初の取り組みとして、人生の折り返し地点に当たる中年期の人々が望む老後像について、あるか否か、さらにその関連要因も含め明らかにする。

この研究には、2通りの意義がある。第1に、高齢期以前に望む老後像を考える事で、その時点における生活満足度だけでなく、幸せな高齢期を迎えられる可能性がある。小田（2003）は高齢者への準備についての研究から、50代前半までに高齢期の準備を漠と考え、60代前半までに高齢期の準備を真剣に考え、準備を始めた人は、高齢期の生活満足度や幸福感が高く、高齢期の準備を考えたり始めたりするのが遅い人は、自らの老化を強く意識している事を示した。さらに、鈴木ら（1997）は、中高年を対象とした研究において、人生設計と現在の満足感との関連から、人生設計済みの方が現在の満足感が高い事を示した。本研究の課題である望む老後像については、人生設計や老後準備を考える事と密接に関連している事から、高齢期だけでなく、それ以前の生活満足度に貢献する可能性がある。

第2に、高齢期を意識しない人がそのまま高齢期を迎える事への対応策を考える事ができる。高齢期を意識しない人は3割もいる事が内閣府の調査で明らかにされている（内閣府2014）。その実現可能性は別にして、高齢期を意識しない人は、高齢期の目標を持つ事が出来ていないという事である。目標達成そのもの、あるいは目標達成のプロセスが生きがいの源泉になる事からすれば、望む老後像を含め高齢期を意識しない人とはどのような人かを解明する事が必要である。

第2に関連して、これまでの研究から、望む老後像の実現には社会経済的格差がある事が予想される。杉澤（2015）は、Jang et al.(2009)、Jopp et al.（2015）の研究を引用しながら、高齢期に多様なモデルを設定し、その中から自分の目標を選択し、その目標の達成に向かって活動できるかどうかには社会経済的な格差が関連していると指摘した。この格差を、望む老後像を考える事によって中年期において自覚できるとすれば、老後生活の基盤となるお金の用意や生活習慣病の予防などの老後準備への契機となり、高齢期に想定される格差を縮小させる事に貢献する可能性がある。

これまでの議論では、中年期を明確に定義してこなかった。老年学領域における中年期を対象とした研究の年齢設定は、40歳から56歳(岡本1985)、40歳から59歳（杉澤1989)、45歳から55歳(難波2000)、40歳から65歳(若本2010)、40歳代から50歳代(西田ら2014）であった。中年期と類似の概念である「壮年」に関しては30歳から59歳（古谷野ら1985)、「中高年」に関しては35歳から64歳(小松ら2000)、45歳から74歳(菅・唐澤2008）という年齢設定であった。以上のように、「中年期」に関しては、社会老年学分野でも明確な定義はない。そこで本研究では、厚生労働省の健康日本21(厚生労働省HP Jan.06,2016)で用いられた、「中年期」45歳から64歳という区分を参考にして、高齢期について想定できるほどには歳を取り、けれども高齢期への準備にはまだ余裕があると感じられるだろうという意味から、45歳から55歳を中年期と定義する。

望む老後像についてもここに定義する。望む老後像とは、個人の望む自己の老後像である。類似する語彙だが、高齢者観は、自己ではなく、一般的な高齢者の見方もしくは一般的な高齢者のイメージとする。

2）先行研究の到達点と解明すべき課題

（１）中年期の人の望む老後像

①到達点

この問題に関する先行研究を探すために、国内論文については、論文検索エンジンのCiniiとDiaLを用いて検索を行った。Ciniiのキーワード検索では、「望む老後像/中年期」0件、「望ましい老後/中年期」0件、「サクセスフル・エイジング/中年期」0件、「サクセスフルエイジング/中年期」0件、「Successful Aging/中年期」4件、「老後生活像/中年期」0件、「老後像/中年期」2件、「将来像/中年期」0件、「望む老い方/中年期」0件、「豊かな老い/中年期」0件、「幸福な老い/中年期」0件、「老後イメージ/中年期」0件であった（Dec.04,2016検索)。DiaL（社会老年学文献データベース）では、「望む老後像/中年期」0件、「望ましい老後/中年期」0件、「サクセスフル・エイジング/中年期」0件、「サクセスフルエイジング/中年期」0件、「Successful Aging/中年期」0件、「老後生活像/中年期」0件、「老後像/中年期」0件、「将来像/中年期」0件、「望む老い方/中年期」0件、「豊かな老い/中年期」0件、「幸福な老い/中年期」0件、「老後イメージ/中年期」0件であった（Dec.04,2016検索)。見いだされた6件の内、重複が1件、

本研究に関連する松永自身の論文が2件、残り3件は望む老後像とは関連しないものであった。つまり、キーワードに中年期と付した場合には、何も先行研究が見いだせなかったという事になる。そこで、「中高年」に条件を広げて、再度キーワード検索を行った。Cinii では、「望む老後像/中高年」0件、「望ましい老後/中高年」0件、「サクセスフル・エイジング/中高年」9件、「サクセスフルエイジング/中高年」9件、「Successful Aging/中高年」12件、「老後生活像/中高年」0件、「老後像/中高年」1件、「将来像/中高年」1件、「望む老い方/中高年」0件、「豊かな老い/中高年」0件、「幸福な老い/中高年」0件、「老後イメージ/中高年」0件であった（Dec.04,2016検索）。見いだされた内14件は重複しており、5件は共著者が同じ調査を基に執筆したものであった。DiaL（社会老年学文献データベース）では、「望む老後像/中高年」0件、「望ましい老後/中高年」0件、「サクセスフル・エイジング/中高年」0件、「サクセスフルエイジング/中高年」1件、「Successful Aging/中高年」0件、「老後生活像/中高年」0件、「老後像/中高年」0件、「将来像/中高年」0件、「望む老い方/中高年」0件、「豊かな老い/中高年」0件、「幸福な老い/中高年」0件、「老後イメージ/中高年」0件であった（Dec.04,2016検索）。海外論文については、検索エンジンのEBSCOhostを用いて、学術誌、学位論文について検索を行った。検索したキーワードと見いだされた論文は、「Successful Aging/middle aged」419件、「Successful Aging/middle ages」17件、「Successful Aging/middle aged/qualitative study」9件、「attitudes towards own old aging/middle aged」8件、「attitudes towards aging/middle aged」58件、「future image/middle aged」31件であった（Dec.05,2016検索）。

機械検索の結果、抽出された論文は582件であり、抽出された論文から重複論文と著者自身の論文を除いた論文数は、548件であった。次いで、題名と抄録から論文を絞り込んだ。まず、題名に高齢者、older adults、elderly、senior、centenariansの記載があり、中年期との対比でないもの175件を除いた。それ以外に、医学（疫学・遺伝・薬）に関するもの87件、特定の対象者に関するもの（性的マイノリティ、HIV、慢性疾患、人種など）68件、身体機能や健康増進に関するもの29件、専門職のケアの在り方（看護・介護・心理職）に関するものが28件、認知機能や記憶機能に関するもの19件、Successful Agingではなく発達課題に関するもの（中年期危機やリタイヤへの対応、更年期症状、レジリエンスなど）18件、社会参加やレジャーとSuccessful Agingに関するものが14件、Successful Agingを主観的幸福感や生活満足度としているものが7件、世代間交流とSuccessful Agingの関連6件、それ以外にも望む老後像に関連しない論文38件（仕事・農業・住居・信仰・音楽・死・ネット・ソフト・などとSuccessful Agingの関連）を除き、59件の論文をレビュー対象とした。その上で、原文を入手し、レビューした59件に、論文で引用されていた先行論文39件と8冊の著書をレビューの対象に加え、最終的に98件の論文と8冊の著書をレビューの対象とした。それらをレビューした後、論文と著書を以下の4つに分類した。①望む老後像の量的研究に分類で

きるもの 18 件、②望む老後像の質的研究に分類できるもの 11 件、③Successful Aging に関する総論や理論、レビュー論文に分類できるもの 24 件と本 6 冊（嵯峨座 1993、小田 2004、杉澤 2008 ほか）④その他（望む老後像の参考になるもの、望む老後像の関連要因の参考になるもの）に分類されるもの 45 件と本 2 冊であった（詳細については研究 3 を参照されたい）。望む老後像の先行研究には、①望む老後像の量的研究と②望む老後像の質的研究の中から中年期を対象として望む老後像とはどのようなものかを明らかにしようと試みたものに限定した。つまり、絞り込んだ際の条件は、高齢者が望む高齢期を送っているかどうかを過去の要因に遡って説明するというベクトルではなく、中年期から高齢期を見るというベクトルを持つという事である。除外した文献の多くは、認知症・エイズ・性的マイノリティ・慢性疾患患者といった特定の人を対象としていたり(Strawbridge et al.2002、Dabis & Yates2014)、望む老後像は何かではなく、現在の生活と主観的健康観とするもの（村山ら 2008)、精神的健康と身体的健康とするもの（Wan & Lin 2011）や、既存の Successful Aging の理論モデルの検証（Strawbridge et al.2002、黒田 2010）を主題にしていた。

質的研究と量的研究の 29 件の内、中年期の人の望む老後像とはどのようなものかという事を検討していた先行研究は以下の 5 件であった。古谷野ら（1985）は、都市の 30 歳から 59 歳を対象として、基本的な枠組みに関わる 8 領域を測定するための 17 の反応カテゴリーを用意し、老後の生活設計の類型化を試みた。その結果、老後の生活像は「家族主義と個人の独立」「隠居と参加」の 2 つの軸から成り立つ事が示された。児玉(1991)は、都市勤労者(年齢についての記載はない)を対象として、24 の質問項目を作成し、高齢者に対する見方及び自分の老後における社会の状況や生活のあり方の類型化を行った。その結果、「同居と別居」「同調と自己主張」という 2 軸を見いだした。児玉ら(1995)は、都市部の 45 歳から 64 歳を対象に、41 の質問項目から構成する「望ましい老後の暮らし方に関する質問」の内 16 項目から類型化を試みた。その結果は、「安定志向と変化志向」「同調志向と自己主張」という 2 つの軸で示せるとしつつも、示された老後は同一の人が両極を選択するといったあいまいなものであった。小手川ら（2005）は、地方都市の郊外に住む 35 歳から 64 歳の理想とする老後像を明らかにするため、身体的・精神的・社会的側面から 14 項目の質問項目を作成し、調査を行った。分析の結果、「とてもそう思う」の回答の高い 4 項目を集約して、自立・心身ともに健康に豊かな老後を送りたいという人たちが多い事を示した。中原・藤田（2007）は、50 歳から 64 歳を対象に、向老期世代の現在の生き方と老後に望む生き方の関係を示すために児玉ら(1995)による「望ましい老後の暮らし方に関する質問項目」16 項目を用いて因子分析を行い、因子負荷量の低い 3 項目を除外して、13 項目で分析を行った。その結果、高齢期に望む生き方を、挑戦と活動的な生き方であるとした。

以上の先行研究で示された、古谷野ら(1985)の「隠居と参加」、児玉ら（1995）の「安定志向と変化志向」は、共通する構成概念であり、中年期からの活動を出来るだけ長く

維持した方がいいとするActivity Theory（活動理論）や活動的な人生から離脱していく事を受け入れる方が良いとした Disengagement Theory（離脱理論）といったSuccessful Agingの理論モデルに対応していると判断できる(Havighurst1961)。中原・藤田（2007）に関しては、Activity Theory（活動理論）をベースとして、生理的な変化や環境の変化に適応しながら中年期の活動を出来るだけ維持する事が良いとしたContinuity Theory(継続性理論)に相応すると言える(Atchley1989)。さらに、古谷野ら(1985)の「家族主義と個人の独立」や児玉（1991)、児玉ら（1995）のこれまでの慣習に従うか否かという「同調志向と自己主張」は共通する構成概念であり。伝統に従うか個人の主義かといった点に絞られる。つまり、従来のSuccessful Agingの理論モデルとは異なる老後像を明らかにしようとしている軸が「家族主義と個人の独立」「同調志向と自己主張」として取り上げられ検証されている（表1参照)。

②解明すべき課題

第1の課題として、中年期を対象とした研究が少ない。だからこそ、中年期を対象として研究をする事を挙げる。

第2の課題として、中年期のみを対象として、望む老後像を自由に語ってもらった内容を質的に分析した先行研究がない。これまでの中年期を対象とした望む老後像に関する研究は、あらかじめ用意された質問項目から見いだされた望む老後像であって（古谷野ら1985、児玉1991、児玉ら1995、小手川ら2005、中原・藤田2007)、望む老後像について自由に語ってもらったものではない。だからこそ、中年期の人に、自由に語ってもらった内容から中年期の人の望む老後像とはどのようなものかを明らかにする必要がある。

第3の課題として、望む老後像に関する質問項目で、信頼性、妥当性が検証された尺度がない。古谷野ら（1985）は老後の生活設計の類型化のために、児玉（1991）は、高齢者に対する見方及び自己の老後における社会の状況や生活のあり方の類型のために、児玉ら（1995）は望む老後像の暮らし方の類型のために、小手川ら（2005）は身体的・精神的・社会的側面から質問項目を作成している。つまり、これまでの研究では何らかの方向性を持って質問項目を作成しているが、その信頼性と妥当性は検証されないままである。そこで、自由に語ってもらった内容を基に作成し、信頼性と妥当性が検証された望む老後像に関する尺度が必要である。

(2)中年期の人の望む老後像の関連要因

①到達点

中年期の人の望む老後像の先行研究として先に触れた①望む老後像の量的研究と②望む老後像の質的研究29件の論文から、中年期の人の望む老後像とはどのようなものかを試み、その上で、関連要因について記述のある先行研究は3件であった。古谷野ら（1985）は、望む老後像の2軸の内、「家族主義と個人の独立」には学歴と年齢が影響する事を明らかにした。学歴が高いほど「個人の独立」を選択する傾向にあった

が、年齢では、40 代は「個人の独立」を 50 代は「家族主義」を、30 代は中間を選択していた。従って、年齢についてはコホート差によるものなのか、年齢差なのか明確には出来なかった。「隠居と参加」では、男性の方が「参加」傾向を持つ事が示された。児玉ら(1995)は、「安定志向と変化志向」「同調志向と自己主張」の 2 軸の内、「同調志向と自己主張」にのみ「年齢」と「学歴」の関連を見いだした。年齢が低いほど、学歴が高いほど軸の中間を選択し、同調志向が弱い事を示した。中原・藤田(2007)は、年齢が高いほど同調志向が増す事と、女性の方が安定・防衛志向を望む傾向を明らかにした。

以上を集約すれば、中年期の人の望む老後像の関連要因として、「変化志向と安定志向（参加と隠居)」には「性」、「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立)」には年齢・学歴が明らかにされている。

②解明すべき課題

課題 4 として、先行研究で明らかにされた関連要因は「性」「年齢」「学歴」といった対象者の基本的な属性であり、それ以外の要因や内的（心理的）関連要因については検討されていない。望む老後像に関連する要因を包括的に把握するためには、これまでの属性だけでなく、社会経済的状況や内的（心理的）関連要因についても検討する必要がある。

3）本研究で解明すること

以上の先行研究の限界を総括して、中年期の人の望む老後像に関して以下の 3 点の研究を設定した。

研究 1 では、中年期の人の望む老後像について自由に語ってもらった内容を質的に分析する事によって、中年期の人の望む老後像とはどのようなものかを明らかにする。

研究 2 では、研究 1 に基づき、「中年期の人の望む老後像に関する質問項目」を作成し、その信頼性・妥当性を検証する。その上で、望む老後像の様相を示す。

研究 3 では、研究 2 で作成した「中年期の人の望む老後像に関する質問項目」を用いて望む老後像に関連する要因を量的研究によって明らかにする（図 1 参照)。

2. 研究 1　中年期の人の望む老後像の解明

1）目的

研究 1 の目的は、中年期の人の望む老後像について自由に語ってもらい、中年期の人の望む老後像を明らかにする事である。

2）方法

（1）調査の対象

調査の対象は、45歳から55歳にある男女を条件として、機縁法によって協力の得られた中年期にある男女である（研究担当者である松永博子の機縁による）。いずれも日野市及び八王子市に在住しており、40代男性6名と50代男性2名の計8名、40代女性6名と50代女性3名の9名、総計17名を分析の対象とした（対象者の職業や婚姻状況、子の有無は表2参照）。

＊以下、対象者の記載において、男性はMに数字、女性にはFに数字という表記とした。

（2）調査期間

調査期間は、2012年10月から2013年1月であった。

（3）データ収集方法

調査対象者に半構造化によるインタビュー調査を行い、その内容をICレコーダーに録音した（15分から30分程度）。

（4）調査内容

「あなたにとって望む老後像とはどのようなものですか。」と質問し、望む老後像について自由に語ってもらい、「なぜそのように考えたのですか」と尋ねた。インタビューの際、「わからない」「考えていない」という回答であった場合、「こうであったらいいなというような老後はありますか。」と尋ね、少し考えてもらい、発言を促した。それでも「わからない」もしくは「思い浮かばない」という回答し、発言がない場合は、インタビューを終了した。

（5）分析方法

KJ法は、混沌とした問題を整理し、問題解決に向けて方法を生み出す手法とされている（川喜多1997）。本研究では、混沌とした問題を整理するため、KJ法を用いる事とした。

研究1では、対象者17名それぞれの望む老後像について概念図を作成した後、概念図で統合された上位の表札と、統合されなかった元ラベルを用いて男性全員と女性全員の概念図を作成した。最後に、男性全体と女性全体の概念図の上位の表札と元ラベルから、中年期の人の望む老後像の概念図を作成した。全体の概念図には、KJ法分析手順の下に記したKJ法関係記号を用いて、概念間の関係を示した。分析の結果とプロセスは、個々・男性全体・女性全体・全体ごとに示した。叙述化は、全体の結果とプロセスの記述後に記述した。

KJ法を使用するにあたっては、KJ法正規認定コンサルタント、エバーフィールドにおいて3日間の研修を行い、KJ法の正規分析方法の習得後、その方式に則って分析を行った（手順については、下記参照）。分析の際には、分析の客観性と妥当性を保つために、もう1名の分析者に、元ラベルの段階から17名分の分析と女性全体・男性全体・全体についての分析を依頼した。この分析者は、質的研究で学会発表を行った経験を持つ者である。分析が飽和した段階で概念図の照合を行い、異なる箇所について

は合意が得られるまで議論した。このような方法で全体の概念図まで照合作業を続けた。さらに、月2回以上のスーパーバイザーの指導の度に分析の報告を行い、疑問点について議論した。このスーパーバイザーは、質的研究のスーパーバイズの経験が豊富で、質的研究に精通している。特に、「生と死への信念」について、もう1名の分析者は「生」と「死」を分けて飽和していたが、「死」は、死後の事ではなく、「日常の中で眠る様に（痛みのない）逝きたい」や「誰かに看取られて逝きたい」という内容であり、「生き抜く」と想定される事から「生と死へのビリーフ」とした。その後、スーパーバイザーからビリーフは一般的ではないという指摘を受け、わかり易い表現として「生と死への信念」という表札となった。それ以外にも、「高齢者観」や「自立（家族に迷惑をかけない）」などについても照合の結果、不一致がみられたので議論を行い、合意を得た。

KJ法分析手順（概略）（川喜多1997）

① 逐語録から元ラベルを作成する。
② 元ラベルから、情報の意味内容の類似性に従って表札を作成し、概念編成を行う（クループ編成は飽和するまで続けられる）。
③ 飽和した概念編成を図解化し、図解の中での島（最上位の表札でまとめられたグループ）同士の関係についてKJ法関係記号を記入し、その関係性を明らかにする。

関係が深い― 影響する因果関係→ 相互に関連する ←→ 支える└┬┘ 矛盾する>―<

④ 出来あがったグループ編成を元に図解化を行い、統合のプロセスの記述と叙述化を行う。

（6）倫理的配慮

協力の得られた対象者に対して、研究の趣旨を口頭及び文書によって説明し、承諾書への署名を得た。音声は、対象者の同意を得て、ICレコーダーに録音した。録音媒体と逐語録については、本論文関係者以外はアクセスできないよう厳重に保管、管理し、研究終了後は、データを破棄する事とした。研究の内容、方法が倫理やプライバシー保護において十分配慮される事については、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得ている。

3）結果

＊以下に分析の結果と統合のプロセス（全体については分析の結果とプロセス、叙述化を表示）を表示した。統合のプロセスの際、元ラベルは「」で示し、1段目の表札は〈〉、2段目の表札は《》、3段目の表札は[]、4段目の表札は【】で示した。

（1）M1（図2参照）

9 枚の元ラベルから、〈旅〉〈家族〉〈趣味を持つ〉という表札と「友達と遊んだり」「自分の事は自分で出来る」「健康」「趣味を活かしたり」「夢を持ってる、退職したら何をしようとか」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈旅〉は、「バイクで日本一周とかね」「キャンピングカー買って旅行とか山登りとか」という元ラベルで構成され、〈家族〉は、「子供とかかみさんが先に逝っちゃったらどうなるかわかんない」「家族がいる事」という元ラベルで構成されていた。

（2）M2（図 3 参照）

9 枚の元ラベルから「悲観も期待もしないあるがまま」「家族に寝たきりがいた事がたぶんにあると思う」という元ラベルと、〈妻がいる事〉〈家族に迷惑をかけたくない〉《長患いしないで逝く》という表札で統合された。

・統合のプロセス

〈妻がいる事〉は、「妻との時間が楽しいのでモチベーションは上がると思う」と「妻との時を出来るだけ過ごす」という元ラベルから構成され、「家族に迷惑をかけない」と「妻を見送って自分が最後に死ぬ」という元ラベルが〈家族に迷惑をかけたくない〉という表札となった。「寝たきりにならない」は「寝込まないですぱっと死ぬ」から〈寝たきりはイヤだ〉という表札となり、その表札に「何も残さずスパッと死ねる事」という元ラベルが加わり《長患いしないで逝く》という表札となった。

（3）M3（図 4 参照）

4 枚の元ラベルから、〈目標〉という表札、「社会に参加出来る事」「人と接する機会を多くしていく」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈目標〉は、「老後楽しめるものを見つけたい」「興味を持ってずっと続けられるものを持つ」という元ラベルによって構成されていた。

（4）M4（図 5 参照）

13 枚の元ラベルから〈長生きはしたくない〉〈妻と旅行〉〈健康〉という表札、「人の世話にはなりたくない」「仕事も働く場所もなくなったら寝るように死んでいきたい」「かみさんよりも先に死にたいって願望はある」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈長生きはしたくない〉は、「長生きしたいとは思ってない」「65 歳から先、生きてると思ってない」「65 から先は考えてない」「早くぽっくり逝った方がいいな」で構成され、〈妻と旅行〉は「健康だったらバイク買ってかみさん乗っけていろんな所を周ってみようかな」「健康ならかみさんと旅行にでも行くかな」という元ラベルで構成され、〈健康〉は「健康なら」「健康だったら」「健康である事」「病気はとにかく嫌だ」という元ラベルで構成されていた。

（5）M5（図 6 参照）

「苦労しない」「好きな事をして過ごす」という 2 枚の元ラベルで示された。

（6）M7（図 7 参照）

8 枚の元ラベルから〈長生きしなくていい〉という表札、「元気」「縁側で寝てるような最期でありたい」「先に死にたいって両方（夫婦）で言ってる」「かみさんとあっちこっち行きたい」「定年になったら好きなことやろうかな」「楽器吹けたらいいなって」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈長生きしなくていい〉は「長生きはいいや（嫌だ）」「長生きしようとは思わなくなってきてる」という元ラベルで構成されていた。

（7）M9（図 8 参照）

8 枚の元ラベルから《社会参加》〈自立〉という表札で統合された。

・統合のプロセス

《社会参加》は、〈社会に関わる〉が、「閉じこもらない」と「社会との関わりを持つ」という元ラベル、〈共助〉が「地域との共存」「ある程度の助け合い」「近所の雪かき」「子供達の安全パトロール」という元ラベルで構成され、その〈社会に関わる〉と〈共助〉によって《社会参加》という表札となった。〈自立〉は、「自立」「最低限の事が出来る」という元ラベルで構成されていた。

（8）M10（図 9 参照）

9 枚の元ラベルから、〈健康〉〈人の世話になりたくない〉〈夫婦の絆〉という表札と「お金に苦労しない事」「親戚で年取ってからオープンカーとか乗ったり、そういうの素敵だと思う」「母親がボケちゃって、下の方もダメになってる」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈健康〉は、「健康」「ボケちゃったりしたらそこでだめだろうけど」という元ラベルで構成され、〈人の世話になりたくない〉は「下の世話を人にやってもらわないで死ねた人は素晴らしい」「最後まで下の世話させないようにしたい」という元ラベル、〈夫婦の絆〉は、「夫婦で一緒に出掛けられる」「夫婦が連れ添っていれば何でもできる」という元ラベルで構成されていた。

（9）F2（図 10 参照）

3 枚の元ラベルから〈信条〉という表札と、「義母によく面倒みてもらっている、義母の様になりたい」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈信条〉は、「命をまっとうしていく」と「生きている事、周囲に感謝する」という元ラベルで構成されていた。

（10）F3（図 11 参照）

6 枚の元ラベルから、〈生活に困らない程度の経済力〉と〈積極的に出かける〉という

表札、「健康である事」「一人暮らしでも時々友人に会えればいい」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈生活に困らない程度の経済力〉は、「お金がないと心配」と「生活に困らない」という元ラベル、〈積極的に出かける〉は「好きなもの見に行ったりしたい」「積極的に外に出て行きたい」という元ラベルで構成されていた。

（11）F4（図 12 参照）

8 枚の元ラベルから〈チャレンジ精神〉〈自立〉という表札、「自分を持つ」「健康」「また絵本作りやりたい」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈チャレンジ精神〉は「いろんな事に挑戦して、いろんな事をしてみたい」「新しい事何でもやってみたい」「好奇心を持つ」という元ラベル、〈自立〉は「人に迷惑をかけない」「自分で何でも出来る」という元ラベルから構成されていた。

（12）F5（図 13 参照）

8 枚の元ラベルから、〈夢〉〈健康〉という表札、「社会とシャットダウンじゃあ淋しい」「明るく」「子供に迷惑をかけない」「お金もいる」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈夢〉は、「調理師とか何か資格とか取ってみたいな」「お店とか出来たらいいな」とう元ラベルで構成され、〈健康〉は、「病気しない」「元気でいる」という元ラベルで構成されていた。

（13）F6（図 14 参照）

4 枚の元ラベルから、〈夫婦で良い距離を保っていきたい〉という表札、「やりたい事があったら何歳でもチャレンジしていいし、いけたらいい何かは分からないけど」「ビーチボールやってて、60、70 になっても元気にやっている人見てて、ああいう風になっていけたらいいな」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

〈夫婦で良い距離を保っていきたい〉は、「子供には自立してもらって夫婦で歩み寄っていきたい」と「夫婦で歩み寄れる所は歩み寄って、お互いいい方向に行けたらいい、チャレンジする時は背中を押してあげたい」という元ラベルで構成されていた。

（14）F7（図 15 参照）

「元気」「自立」「孫の面倒を見る」「フラダンスや墨絵、陶芸やってる母を見ててそういうのやりたいなって」という 4 枚の元ラベルで示された。

（15）F8（図 16 参照）

「他人に迷惑かけずに自分でしたい」「出来れば趣味とか持ちたいかな」という 2 枚の元ラベルで示された。

（16）F9（図 17 参照）

「人と関わり合う（家族を含めて）」「やりたい事をする（今まで出来なかった）」「健康」「ほどほどに社会に貢献する」という 4 枚の元ラベルで示された。

（17）F11 （図 18 参照）

「健康で過ごせるのがいいな」「孤独は嫌だから友達と連絡取れるようにしてたい」「笑っていたい」という 3 枚の元ラベルで示された。

（18）男性全体（図 19 参照）

（1）から（8）に示した表札と、統合されなかった元ラベルを元ラベルとして用い、統合を行った。37 の元ラベルから、《高齢者像からの影響》《望む最期》《健康を保つ》《自立する》〈人と交流していく〉〈夢や目標がある〉〈趣味を持つ〉〈配偶者（妻）と過ごす〉〈社会に参加していく〉〈長生きしたくない〉という表札、「家族といる」「悲観も期待もしないあるがまま」「苦労しない」「お金に苦労しない」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

《高齢者像からの影響》は、「母親がぼけちゃって、下の方もダメになってる」と「家族に寝たきりがいた事がたぶんにある」が、〈嫌な高齢者像〉という表札になり、「親戚で年取ってからオープンカーとか乗ってそういうの素敵だと思う」と〈嫌な高齢者像〉が《高齢者像からの影響》という上位の表札に統合された。《望む最期》は、「仕事も働く場所もなくなったら寝るように死んでいきたい」と「縁側で寝てるような最期でありたい」が〈苦しまない最期〉となり、「かみさんよりも先に死にたいっていう願望はある」「先に死にたいって両方で言ってる」が、〈看取られたい〉になり、「長患いしないで逝く」と〈苦しまない最期〉〈看取られたい〉から、上位の《望む最期》となった。〈人と交流していく〉は、「人と接する機会を多くしていく」「人との会話」「友達と遊ぶ」から〈人と交流していく〉という表札となった。《自立する》は、「人の世話になりたくない」と「人の世話にはなりたくない」から〈人の世話になりたくない〉という表札となり、「家族に迷惑をかけない」「自分の事は自分で出来る」「自立」から〈自分の事は自分でする〉という表札となり、〈人の世話になりたくない〉と〈自分の事は自分でする〉から《自立する》という上位の表札となった。〈夢や目標がある〉は「夢もってる退職したら何しようとか」「定年になったら好きなことしようかな」「目標」「好きなことをして過ごす」から、〈趣味を持つ〉は「楽器吹けたらいいなって」「趣味を活かしたい」「旅」からで、〈健康を保つ〉は「健康」3 枚と「元気」によって、〈配偶者（妻）と過ごす〉は「妻と旅行」「妻がいる事」「かみさんとあっちこっち行きたい」「夫婦の絆（共にいる事）」から、〈社会に参加していく〉は「社会に参加出来る事」「社会参加」から成り、〈長生きしたくない〉は「長生きはしたくない」「長生きしなくていい」によって構成されていた。

（19）女性全体（図 20 参照）

（9）から（17）に示した表札と、統合されなかった元ラベルを 33 枚の元ラベルとし

て用い、統合を行った。《人と関わっていく》《自立する》〈自分のやりたい事にチャレンジする〉〈健康〉〈経済力〉〈生きていく姿勢〉〈社会や家族の役に立ちたい〉〈望ましい高齢者像〉という表札と、「夢（お店とか）がある」「夫婦で良い距離を保っていきたい」「積極的に出かける」という元ラベルで統合された。

・統合のプロセス

《人と関わっていく》は、「一人暮らしでもいい時々友達に会えれば」と「孤独は嫌だから友達と連絡が取れるようにしていたい」から〈友人関係〉となり、「人と関わり合う（家族を含めて）」と「社会とシャットダウンじゃあ寂しい」と〈友人関係〉〈人との交流〉から、《人と関わっていく》という上位の表札となった。《自立する》は、「他人に迷惑かけずに自分でしたい」と「子供に迷惑かけない」が〈他人や子供に迷惑をかけない〉となり、「自立」2 枚から〈自立〉となり、〈他人や子供に迷惑をかけない〉と〈自立〉という 2 枚の表札から《自立する》という上位の表札となった。〈自分のやりたい事にチャレンジする〉は、「できれば趣味なんか持ちたいかな」「また絵本作りをしたい」「チャレンジ精神（色々やってみたい）」「やりたい事があったら何歳でもチャレンジしていいし、いけたらいい、何かわかんないけど」「やりたい事をする（今まで出来なかった）」から、〈健康〉は「健康」2 枚と「健康で過ごせるのがいい」「健康である事」「元気」によって成り、〈経済力〉は「お金もいる」「生活に困らない程度の経済力」から、〈生きていく姿勢〉は「自分を持つ」「明るく」「信条（生きる事への）」「笑っていたい」によって、〈社会や家族の役に立ちたい〉は「ほどほどに社会に貢献する」「孫の面倒をみる」からなり、〈望ましい高齢者像〉は「ビーチボールやってて、60、70 になっても元気にやっている人を見てて、ああいう風になっていけたらいいな」「義母によく面倒見てもらっている。義母のようになりたい」「フラダンスや墨絵、陶芸やってる母を見て、そういうのやりたいなって思う」という元ラベルから構成されていた。

（20）全体（図 21、22 参照）

（18）と（19）に示した表札と、統合されなかった元ラベルを 26 枚の元ラベルとして、統合を行った。その結果、【望む老後像を持つ】〈望む老後像は持たない〉〈高齢者観〉〈生と死に対する信念〉という 4 つの表札で統合された。【望む老後像を持つ】と〈望む老後像は持たない〉は〈高齢者観〉と〈生と死への信念〉からの影響を受けていた。【望む老後像を持つ】の下位にある《挑戦と活動》は[自立（家族に迷惑をかけない）]に支えられていた。

・統合のプロセス

【望む老後像を持つ】は、「夢（お店とか）がある」「自分のやりたい事に挑戦する」「夢や目標がある」「趣味を持つ」「好きな事をして過ごす」が〈夢ややりたい事を挑戦〉という表札となり、「友達と遊ぶ」「人と交流していく」「社会に参加していく」「人と関わっていく」が〈社会に参加する〉となり、「社会や家族の役に立つ」と「積極的に出かける」〈夢ややりたい事を挑戦〉〈社会に参加する〉が統合され《挑戦と活動》となっ

た。「夫婦で良い距離を保っていきたい」と「配偶者（妻）と過ごす」が〈夫婦の時間〉となり、そこに「家族といる」が加わり、《夫婦・家族と共にいる》という表札になった。「お金に苦労しない」と「経済力」から〈経済力〉となり、「健康」と「健康を保つ」が〈健康である〉に、「自立する」2 枚が〈自立する〉となり、〈経済力〉と〈健康である〉と〈自立する〉から《自立》という上位の表札となり、《夫婦・家族と共にいる》と《自立》が[自立（家族に迷惑をかけない)] という上位の表札に統合された。その表札は、家族に迷惑をかけないで一緒に過ごしたいという《夫婦・家族と共にいる》を強調するものであった。さらに、[自立（家族に迷惑をかけない)] と《挑戦と活動》が、最上位の【望む老後像を持つ】に至った。〈望む老後像は持たない〉は、「悲観も期待もしないあるがまま」「長生きしたくない」が統合され〈望む老後像は持たない〉という上位の表札となった。〈高齢者像〉は「望ましい高齢者像」と「高齢者像からの影響」によって、〈生と死に対する信念〉は「望む最期（死に方)」と「生きる姿勢（信念)」によって構成されていた。

・叙述化

中年期にある人には、望む老後像を持つ人と持たない人が存在する。望む老後像を持つ人は、家族に迷惑をかけないで、家族と共に自立した老後像を望んでおり、それが可能であれば目標や生きがいを持って生きたいと考えている。望む老後像を持たない人には、敢えて望む老後像を持たないという人と長生きをしたくないという人がいる。いずれの人たちも生きる事や死に対する信念、憧れの高齢者やなりたくない高齢者像を持っていた。

4) 考察(図 23 参照)

中年期の人の望む老後像の構成概念として、「望む老後像を持つ」には、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない)」という老後像が見いだされ、「望む老後像は持たない」には、「敢えて望む老後像は持たない」「長生きしたくない」という概念が示された。

古谷野ら(1985)児玉ら（1995）の明らかにした軸の 1 つは「変化志向と安定志向（参加と隠居)」、もう 1 つの軸は「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立)」というものであった。「挑戦と活動」と「自立（家族に迷惑をかけない)」は、「変化志向と安定志向（参加と隠居)」に重なるものである。「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立)」については、「自立（家族に迷惑をかけない)」が自分の事は自分で行いながらも家族と共にあるという内容であり、そのどちらもが共存する生き方であると位置づけられる。小手川ら（2005）は「自立や心身共に豊かな高齢期を送りたい」としており、それは、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない)」に重なるものであった。「挑戦と活動」は、中原・藤田（2007）の明らかにした「変化・挑戦的な生き方を望む」という結果を部分的ではあるが支持するものであった。「望む老後像は持たな

い」という構成概念は、これまで示されていないものであり、中年期の人に語ってもらった内容から見いだした新たな知見である。「望む老後像は持たない」は、「長生きしたくない」や「悲観も期待もしないあるがまま」という下位の概念で構成されていた。

「望む老後像を持つ」の「挑戦と活動」と「自立（家族に迷惑をかけない)」には、自立が可能であれば、挑戦したいといった老後の生き方の希望の在り方への段階が見受けられた。そう解釈する根拠として、「まずは、健康で自分の事が自分でできて家族がいてくれる事かな、それが叶うなら、趣味を活かしたり、バイクで日本一周とかね・・・」といった発言や、「まあ最低限の事が出来る、自分の事が自分で出来てたら、近所の雪かきとか子供たちの安全パトロールとか地域と共存しながら社会に関わりたいよね」「健康だったら、バイク買ってかみさん乗っけていろんな所を周ってみようかな」といった発言からである。欲求のヒエラルヒーを提唱した Maslow(1971)は、人間の基本的欲求はその相対的優勢さによってヒエラルヒーを構成しているとしたが、中年期の人の望む老後像には、「自立（家族に迷惑をかけない)」が叶うのであれば、「挑戦と活動」をしたいという Maslow (1971) の欲求のヒエラルヒーにも模した望む老後像のヒエラルヒーが見受けられた。そのヒエラルヒーは、古谷野ら(1985)の示した「隠居と参加」や児玉ら(1995)の示した「変化志向と安定志向」と同義であり、軸の対極に位置するとされた「隠居と参加」や「変化志向と安定志向」は、むしろ望む老後像のヒエラルヒーであったと言える。さらに付け加えるなら、「変化志向と安定志向」の対極にあるのは、「放棄志向」とも位置付けられ、「望む老後像は持たない」といった構成概念であると解釈できる。

中年期を対象とした望む老後像ではなく高齢期を対象とした先行研究ではあるが、「あなたにとって望む老後像とは何ですか」と質問した内容を質的に分析した研究から見いだされた構成概念を、中年期の人の望む老後像の構成概念と比較するために以下に示す。Troutman-Jordan & Staples(2014)は、地域に居住する 55 歳から 99 歳を対象として、「自立」「人との交流」「神との関係」「快適な社会資源（住まいやお金)」「健康」「社会貢献」「積極的な考え方や対応」「自由」という構成概念を見いだし、Lewis (2013)は、アラスカの原住民で地域に居住する高齢者を対象として、「スピリチュアリティ」「良好な感性」「コミュニティに関わる」「身体の健康」といった 4 つの構成概念を見いだした。それらを類型化すると、「自立（健康・社会資源（住まいやお金))」と「社会貢献・社会参加」に加え、「信念・信条(神・積極的な考え方・良好な感性)」という類型が見いだせる。それは、研究 1 で見いだされた「自立(家族に迷惑をかけない)」と「挑戦と活動」、「生と死への信念」と重なるものであった。

望む老後像に影響を与える構成概念として、「高齢者観」、「生と死への信念」が見いだされた。「高齢者観」は、憧れの高齢者といった肯定的な高齢者観とこうなりたくないといった否定的な高齢者観から構成されており、高齢者が望む老後像のモデルとな

っている事を意味していた。「生と死への信念」は、男性と女性で異なっており、男性は「死への信念」を語り、女性は「生への信念」を語っていた。「死への信念」は、死に際に関する事であり、痛みのない最期や看取られたい、看取りたいというものであった。「生への信念」は、自分の価値観を持つ事や、明るく過ごす事、人に感謝する事などであった。現段階ではこれらが関連要因であると明言は出来ないが、望む老後像に関連する心理的な要因の可能性がある。

集約すれば、研究 1 の知見の第 1 は、中年期の人の望む老後像とは、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」と「望む老後像は持たない」という概念によって構成されていた事である。知見の第 2 は、中年期の人の望む老後像とは、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」という「自立（家族に迷惑をかけない）」した上で、「挑戦と活動」したいといったヒエラルヒーが存在する事である。ヒエラルヒーは、児玉ら(1995)の示したあいまいの解釈を可能とするものであった。言い換えれば、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」は、「隠居と参加」（古谷野ら 1985）や「変化志向と安定志向」（児玉ら 1995）の結果を支持するものであった。知見の第 3 は、「望む老後像は持たない」という構成概念が見いだされた事である。知見の第 4 は、中年期の人の望む老後像に影響を与える構成概念として、「高齢者観」と「生と死への信念」が示された事である。知見の第 5 は、中年期の人の望む老後像と高齢期の人の望む老後像とは構成概念の類型に共通点が多く見受けられた事である。

最後に、知見の第 6 として、「望む老後像は持たない」という構成概念の下位概念に加えるべき存在を指摘する。インタビューの際、「わからない」もしくは「考えた事がない」と回答した人は、7 人(M1、M2、M7、M9、F7、F8、F11)にも及んだ。インタビューの際は、その様に回答した場合は少し考えてもらい、インタビューを継続したが、その下位概念は、内閣府の調査で見いだされた「老後を意識しない」という人たちの存在を裏付ける結果であった（内閣府 2014）。よって、研究 2 以降では、「望む老後像は持たない」の下位概念に「考えてない・わからない」を加え、中年期の人の望む老後像の検討を行う事とする。

5）研究の限界

研究 1 の限界に、婚姻状況や子の有無などできるだけ多様な事例サンプリングを行ったが、充分な理論的サンプリングにまでには至らなかったという点を挙げる。

よって、研究 1 の分析対象のデータによって知り得た知見が一般化出来るのかどうかは明らかではない。そこで、研究 1 で見いだされた知見が一般化出来るかを明らかにするために、研究 2 ではランダムサンプリングによって、標本数を増やした追究を試みる。

3. 研究 2　中年期の人の望む老後像に関する質問項目の作成と望む老後像

1）目的

研究1で示された、中年期の人の望む老後像には「望む老後像を持つ」と「望む老後像は持たない」という2つの構成概念があり、「望む老後像を持つ」の下位の構成概念として「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」が見いだされ、「望む老後像は持たない」の下位の構成概念として「長生きしたくない」「悲観も期待もしないあるがまま」が見いだされた。さらに、「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」には、望む老後像のヒエラルヒーが示された。

そこで研究2では、第1に、研究1で示された「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない）」「望む老後像は持たない」という3つの構成概念に加え、研究1で多く発言された「考えていない・わからない」という構成概念も含んだ望む老後像に関する質問項目を作成し、質問項目の構成概念妥当性と信頼性を検証する。第2に、「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」にヒエラルヒーが存在するかどうかを検討する。第3に、望む老後像の質問項目と尺度の分散を確認し、中年期の人の望む老後像とはどのようなものかを明らかにする。

2）方法

(1)調査の対象と調査方法

東京都日野市在住の45歳から55歳（年齢は転記日である2013年9月26日付）800人を、選挙人名簿から系統抽出し、郵送法による自記式調査を実施した。系統抽出法は、全年齢を系統抽出の対象とし、系統抽出の対象が当該年齢階級に該当しない場合には、直近の当該年齢の人を対象とした。すなわち、20歳以上歳全体143,887人から800人を抽出するため、179人毎（143,887/800）の抽出間隔で系統抽出を行い、系統抽出の対象が45～55歳に該当しない場合には、直近の当該年齢の人を対象とした（人口数は日野市HP Aug.05,2013）。

日野市を研究の対象に選定した理由に、日本全体の45歳から55歳の割合が13.6%（国立人口問題研究所HP Dec.23,2014）であるが、日野市の割合が14.4%（日野市HP Oct.01,2013）であり、東京都下でありながらも全国平均に近い事から、中年期の人の意見を反映できると考えた。その上、日野市の課税対象所得の偏差値は49.1であり、全国の51.8よりもやや低いが全国平均に近い値である（内閣府HP Aug.11,2016）。緒言で示したように、望む老後像には社会経済的格差の存在が指摘されている。そこで、東京都下にありながらも、全国平均よりやや低い社会経済的背景を持つ日野市に居住する人を対象にする事で、やや低い階層の人々の意識も十分に拾い上げるのに適切であると考えた。

回収された調査票は、128票であったが、そのうちの4票は白紙回答の為、124票を分析の対象とした。男性が約57%、女性が約43%であり、回収率は15%であった。

一般に、調査対象者が青壮年の場合は回収率が低くなりがちであるとの傾向が指摘されている上に(古谷野・長田 1992)、個人情報保護法の制定以降、国民の個人情報への意識が高まり、調査そのものが難しい状況となり、回収率が低くなったと想定される。

(2)調査期間

調査は 2013 年 12 月初旬から 12 月末に実施した。

(3)分析方法

KJ 法と IBM SPSS 統計解析ソフト 23 と Amos23 を用いた。

①質問項目の作成

研究 1 で語られた内容を KJ 法によって集約し、それらを基に 3 つの構成概念に関する質問項目を作成した。その際、児玉ら（1995）の質問項目と同じ表札については、児玉ら（1995）の質問項目を用いた。

②確証的因子分析と構成概念妥当性、信頼性の検証

共分散構造分析を用い、モデル適合度を確認し、信頼性のクロンバッハのα係数を算出した。

③望む老後像に想定されるヒエラルヒーの検討

ヒエラルヒーの存在を明らかにするために、望む老後像に関する質問項目がガットマン尺度の様相を呈しているかについて、グリーンの手法を用いて確認した（安田・原 1987)。「まったくそう思う」「少しそう思う」の値を「1」、「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全然そう思はない」の値を「0」とし、「1」の値が少ない順に 8 項目からなるスケーログラム表を作成した。スケーログラム表に記載されたエラー数をカウントし、ガットマンの再現性係数を算出した。ガットマン尺度であるかは、以下の 5 つの条件によって判断する。㋐再現性係数 90%以上㋑20%以下・80%以上の回答カテゴリーばかりでない㋒エラーよりノンエラーが多い㋓10 項目以上で構成されている㋔エラーが無作為に散らばっている

④項目の分散と尺度の分散の検証

各項目の平均値と標準偏差、歪度・尖度を算出し、尺度の分散を確認した。

(4)倫理的配慮

質問紙の表紙に、倫理的配慮について明記した。それらにより、回答をもって同意を得たものとした。選挙人名簿から転記した対象者の個人情報については、執筆者の責任において厳重に保管、管理を行っている。本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3) 結果

(1)質問項目作成のプロセス

研究 1 で分析に用いた 104 の元ラベルと研究 1 では分析に加えなかった「考えてな

い・わからない」という10の元ラベルから、KJ法を用いて集約を行った。見いだされた表札は、〈新しいこと何でもやってみたい〉〈色んな事に挑戦して色んな事をしてみたい〉〈キャンピングカー買って旅行(旅行などに関する発言)〉《人と社会に関わる(人との交流)》〈社会に貢献する〉〈長生きしたくない〉〈考えていない・わからない〉「悲観も期待もしないあるがまま」〈反面教師の高齢者〉〈自分の事は自分で出来るようにしていく〉《家族や子供に迷惑をかけない(妻や子供がいてくれる事)》〈人に迷惑をかけない〉〈健康・元気でいたい〉〈モデルとする高齢者〉〈生きる信念〉〈死の事〉〈好きなことをする〉「苦労したくない」というものであった（元ラベルは「」、1段目は〈〉、2段目は《》で示した）。その内、児玉ら（1995）の質問項目と同様のものは、「新しいこと何でもやってみたい」「色んな事に挑戦して色んな事をしてみたい」「キャンピングカー買って旅行(旅行に関する発言)」「人と社会に関わる(人との交流)」「社会に貢献する」であり、5つの表札については、児玉ら（1995）の質問項目を採用する事とした。その質問項目は、「新しいことを始めたい」「いろいろなことをやってみたい」「変化のある暮らしをしたい」「人間関係を広げたい」「社会のために尽くしたい」という5項目であり、中原・藤田（2007）が、児玉ら(1995)の「望ましい老後の生き方に関する質問項目」を用いて因子分析した際に「変化・挑戦志向」に分類されたものであった。「自立（家族に迷惑をかけない)」に関する表札は、「反面教師の高齢者」「自分の事は自分で出来るようにしていく」「家族や子供に迷惑をかけない(妻や子供がいてくれる事)」「人に迷惑をかけない」「健康・元気でいたい」であり、質問項目を「なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい」「自分の事は自分でするようにしていきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「わがままな高齢者にならないようにしいていきたい」「健康でいるように努力したい」とした。「望む老後像は持たない」に関する表札は「長生きしたくない」「考えていない・わからない」「悲観も期待もしないあるがまま」であり、質問項目を「長生きしたくない」「老後は特に考えていない」「なすがまま敢えて努力はしない」とした（表3参照)。質問項目作成の際は、主観的な判断に陥らないようスーパーバイザーと共に作業を行った。

作成した質問項目は以下の通りである。「新しいことを始めたい」「いろいろなことをやってみたい」「変化のある暮らしをしたい」「人間関係を広げたい」「社会の為に尽くしたい」「なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい」「自分の事は自分でするようにしていきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「わがままな高齢者にならないようにしたい」「健康でいるように努力していきたい」「長生きしたくない」「老後は特に考えていない」「なすがまま、敢えて努力はしない」の13項目であった。その内、児玉ら(1995)の質問項目と同じものは、5項目であり、新たに作成したものは、8項目であった（表4参照)。回答選択肢は、「まったくそう思う」に5点、「少しそう思う」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまりそう思

わない」に2点、「全然そう思わない」に1点を与えた。

(2)確証的因子分析

13項目を用いて共分散構造分析を行い、構成概念妥当性を試みた。因子Ⅰは「いろいろなことをやってみたい」「新しいことを始めたい」「変化のある暮らしをしたい」「人間関係を広げたい」「社会の為に尽くしたい」、因子Ⅱは、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」「なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「自分の事は自分でするようにしていきたい」「健康でいるよう努力していきたい」、因子Ⅲは、「老後は特に考えていない」「なすがまま、敢えて努力はしない」「長生きしたくない」としてパス図を作成した(図24参照)。共分散構造分析のモデルは成立したが、「社会の為に尽くしたい」.29と「健康でいるよう努力していきたい」.33はパス係数が低いため、項目から削除し、再度、11項目で共分散構造分析を行い、CFI=.986、RMSEA=.027というモデル適合を確認した。それにより、望む老後像に関する3つの因子の構成概念妥当性が検証された(図25参照)。

見いだされた3つの因子は、その内容から望む老後像の下位概念ではなく、3つの概念であると考え、望む老後像への3つの概念に関する質問項目の探索的因子分析を行った。「挑戦と活動」に相応する質問項目として、「人間関係を広げたい」「新しいことを始めたい」「変化のある暮らしがしたい」「いろいろなことをやってみたい」という4項目について因子分析を行い、1つの因子で構成されているのを確認した(表5参照)。 Cronbachのα係数は.788であり、信頼性を確認した。尺度名については研究1と同様に「挑戦と活動」とした。「自立(家族に迷惑をかけない)」に相応する質問項目として、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「自分の事は自分でするようにしたい」「なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい」という4項目について、因子分析を行い、1つの因子で構成されているのを確認した(表6参照)。 Cronbachのα係数は.673であり、信頼性を確認した。尺度名については研究1で見いだされた「自立(家族に迷惑をかけない)」と意味内容は一致しているが、よりわかりやすい表現として、因子名を「迷惑をかけたくない」とした。「望む老後像は持たない」に関する質問項目としては、「長生きしたくない」「老後は特に考えていない」「なすがまま、敢えて努力はしない」という3項目について因子分析を行い、1つの因子である事を確認した(表7参照)。Cronbachのα係数は.611であり、若干低いが信頼性を確認した。尺度名については「望む老後像は持たない」と同義だが、老後の「放棄志向」である事から、「放棄」とした。これらにより、3つの尺度が作成された。

(3)望む老後像に存在するヒエラルヒーの検討

「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」の質問項目の回答を「1」「0」の値に変換し、「1」の値の少ない順にスケーログラム表と一覧表、エラー表を作成した(表8-10参照)。回答数の少ない順に項目と回答率を示す。「変化のある暮らしをしたい」65(52.8%)、

「人間関係を広げたい」72（58.5%）、「新しいことを始めたい」93（75.6%）、「いろいろなことをやってみたい」100（81.3%）、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」111（90.2%）、「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」112（91.1%）、「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」114（92.7%）、「自分の事は自分でするようにしていきたい」119（96.7%）であった。エラー数は、「変化のある暮らしをしたい」と「人間関係を広げたい」間は 17、「人間関係を広げたい」と「新しいことを始めたい」間は 10、「新しいことを始めたい」と「いろいろなことをやってみたい」間は 6、「いろいろなことをやってみたい」と「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」間は 8、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」と「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」間は 6、「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」と「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」間は 8、「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」と「自分の事は自分でするようにしていきたい」間は 3 であり、エラー数の合計は 51 であった。エラー数からガットマンの再現性係数（1―エラー数/（n×項目数））を算出した所、94.81%の値であった。ガットマン尺度であるかの確認をすると、㋐再現性係数 90%以上㋑20%以下・80%以上の回答カテゴリーばかりでない㋒エラーよりノンエラーが多い㋓8 項目だが、この分析は尺度ではなく 2 つの因子間の関連を示すため不問とする㋔エラーが無作為に散らばっているといった点から、これら 8 項目はガットマン尺度の様相を呈していると判断できる。8 項目は通過率の低い順に「挑戦と活動」の項目「迷惑をかけたくない」の項目となっており、「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」に想定されるヒエラルヒーが示された。

(4)各項目の平均値と標準偏差、尺度の平均値と分散

各項目の平均値と標準偏差を以下に記す。「老後は特に考えていない」の平均値は 2.16 で標準偏差は 1.039、「なすがまま、敢えて努力はしない」の平均値は 2.38 で標準偏差は 1.094、「長生きしたくない」の平均値は 2.87 で標準偏差は 1.140、「変化のある暮らしをしたい」の平均値は 3.46 で標準偏差は 1.100、「人間関係を広げたい」の平均値は 3.69 で標準偏差は 0.966、「新しいことを始めたい」の平均値は 3.96 で標準偏差は 0.914、「いろいろなことをやってみたい」の平均値は 4.17 で標準偏差は 0.908、「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」の平均値は 4.49 で標準偏差は 0.749、「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」の平均値は 4.52 で標準偏差は 0.631、「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」の平均値は 4.54 で標準偏差は 0.705、「自分の事は自分でするようにしていきたい」の平均値は 4.71 で標準偏差は 0.522 であった（表 11 参照、分散、歪度、尖度については表を参照されたい）。

3 つの尺度の平均値と標準偏差を以下に記す。「挑戦と活動」の平均値は 15.27 で標準偏差は 3.051、「迷惑をかけたくない」の平均値は 18.28 で標準偏差は 1.844、「放棄」の平均値は 7.41 で標準偏差は 2.456 であった（表 12、図 26-29 参照、分散、歪度、尖度については表を参照されたい）。

4）考察

（1）望む老後像への質問項目について

研究2では、研究1で明らかにされた、「望む老後像を持つ」の下位概念である「挑戦と活動」と「自立（家族に迷惑をかけない）」、そして、「望む老後像は持たない」を明らかにするための中年期の人の望む老後像に関する質問項目として「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」という3つの望む老後像に関する尺度を作成した。

これまで使用されてきた、望む老後像に関する質問項目は構成概念妥当性や信頼性の検証が行われていない（古谷野ら1985、児玉1991、児玉ら1995、小手川2005）。中原・藤田（2007）が、児玉ら（1985）の質問項目を用いて、因子分析を行った際に「変化・挑戦志向」「安定・防衛志向」「同調志向」の3つの因子を見いだした。その際の「変化・挑戦志向」の7項目の内、5項目は研究1で発言された内容を集約した表札と酷似しており、それらは「挑戦と活動」に位置するものであった。「安定・防衛志向」と「同調志向」は6項目からなるが、それらの項目に関しての表札は見受けられなかった。

最終的に、「挑戦と活動」尺度の4項目は、児玉ら（1995）の質問項目から用いたものであり、それは、児玉ら（1995）の4項目が「挑戦と活動」を測るのに有効である事を裏付けるものであった。「迷惑をかけたくない」の4項目、「放棄」の3項目は新たに作成したものである。それにより、中年期の人の望む老後像の「迷惑をかけたくない」と「放棄」を測る事が可能となった。「迷惑をかけたくない」尺度は、自立（健康や経済）についてよりも迷惑をかけない傾向や高齢者からの影響を持つ尺度となった。「放棄」尺度に関しては、研究1の下位概念で示された「長生きしたくない」「悲観も期待もしないあるがまま」に、「わからない」や「考えた事がない」といった発言への対応として「老後は特に考えていない」を加えたが、それによって、望む老後像を意識はするが、敢えて望む老後像は持たないのか、それとも、望む老後像を意識していないから望む老後像は持たないのかといった点に混同が生じる尺度となった。

（2）望む老後像に存在するヒエラルヒーの検討

8項目によるスケーログラム分析の結果、その配列は、「挑戦と活動」の4項目、「迷惑をかけたくない」の4項目の順になっており、「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」の項目はガットマン尺度の様相を呈していた（図29参照）。ガットマン尺度は、ある質問に賛成した者はそれ以降の質問にも賛成するという条件となっている（安田・原1987）。つまり、「挑戦と活動」に賛成した回答者は「迷惑をかけたくない」にも賛成しており、それは「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」にあるヒエラルヒーの存在を示すものであった。それにより、児玉ら（1995）があいまいとした「安定志向と変化志向」は、対極に位置するものではなく、ヒエラルヒーの上下に位置する事が明らかになった。

（3）各項目の平均値と標準偏差、尺度の平均値と分散項目と尺度の分散について

各項目の平均値と標準偏差から、「迷惑をかけたくない」尺度の 4 項目の「わがままな高齢者にならないようにしていきたい」「家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい」「なりたくない高齢者にならないようにしていきたい」「自分の事は自分でするようにしていきたい」と「挑戦と活動」尺度の「いろいろなことをやってみたい」については天井効果が認められた。それは、「迷惑をかけたくない」という望む老後像が多くの人に支持されている事を示すものでもある。

尺度の平均値と分散から、「放棄」を選択した人が少ないという事が示され、分散はやや左に偏ってはいるが、正規分布の様相を示していた。「挑戦と活動」は、平均値もおおよそ中央に位置し、正規分布の様相を示していたが、高い値に天井効果が見られ、尺度の全体像を明らかには出来なかった。「迷惑をかけたくない」は、天井効果を示しており分散が見られなかったが、項目での記述と同様に、ほとんどの回答者の支持を得た望む老後像であると位置付けられる。

5）研究の限界

本研究の限界として、第 1 に、郵送法による問題点について言及する。自記式質問紙、郵送法の場合、宛名本人が記入したかがわからないという点を挙げる。次に、記入の上、返信してもらうため、調査対象者の意思が必要である。それらを踏まえると、本調査の回答者の傾向には、自己の将来について関心がある人に偏った恐れがある。一般に、調査対象者が都市の青壮年の場合には、とくに回収率が低くなりがちであるという傾向が指摘されている。そのような限界点を踏まえ郵送法を用いた理由に、古谷野（1985）と児玉ら（1995）が採用した留め置き法に比べ、調査員の影響を考慮する必要がない上、郵送法は、限られた予算で広範囲に居住する多くの人を対象とした調査を行う事が可能だからである(古谷野・長田 1992)。

第 2 に、回収した有効回答が 124 票である事を挙げる。質問紙に同封した依頼文には、調査の概要や、個人情報の情報源についての説明、個人情報保護に関する説明を記したが、回収率が上がらない上に、どのようにして個人情報を入手したのかといったクレームが多く、日野市に対してもなぜ個人情報を提供したのかといったクレーム、桜美林大学大学院や桜美林大学加齢・発達研究所（現、桜美林大学老年学総合研究所）に対しても、そのような生徒がいるのか、本当に調査をやっているのか、なぜそのような調査をさせるのかといったクレームがあり、督促状を兼ねたお礼状の送付を断念せざるを得ない状況となった。本調査前に、自治体との共同調査を願い出たが、この数年内に中年期を対象とした調査の設定がなく、共同で調査を行う事は不可能な状況であった。そこで、桜美林大学大学院博士後期課程の生徒として個人で調査を行ったが、その事も回収率を上げられない一因となったと想定される。その背景に、2003 年の個人情報保護法の制定から、国民の個人情報への意識が高まり、調査そ

のものが難しい状況となっていると想定される。

第 3 に、標本の男女比率が母集団と異なる事を挙げたい。母集団である日野市の 45 歳から 55 歳の男女の比率は、男性 52.9%、女性 47.1%であった（日野市 HP,Aug.01,2013）が、質問紙を郵送した対象者 800 名の男女比は、男性約 65%、女性約 35%であり、回収された調査票の男女比は、男性約 57%、女性約 43%であった。標本誤差が生じていたと考えられる。

しかしながら、上記の全ての限界点を認識した上で、本研究で示された中年期の人の望む老後像は、これまで明らかにされていない知見であり論文として示すに値すると考えた。

4. 研究 3　中年期の人の望む老後像に関連する要因の解明

1)目的

研究 2 で作成した「望む老後像に関する 3 つの尺度」すなわち「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」を用いて、中年期の人の望む老後像の関連要因を示す。

緒言で示したように、先行研究では、中年期の人の望む老後像の関連要因として、「変化志向と安定志向」には「性」、「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立)」には年齢・学歴が明らかにされている。研究 1 では「同調志向と自己主張（家族主義と個人の独立)」は、「自立（家族に迷惑をかけない)」という望む老後像の下位概念に共存するものであり、軸の様相を呈していなかった。そこで、「変化志向と安定志向」との関連が示された「性」が第 1 の関連要因であると想定される。男性の方が「挑戦と活動」を、女性の方が「迷惑をかけたくない」「放棄」を望む傾向が想定される。それ以外の関連要因として、第 2、第 3 に、緒言でも記述した「主観的健康状況」「主観的経済状況」を挙げておきたい。杉澤（2015）は、Jang et al.(2009)、Jopp et al.（2015）の研究を引用しながら、望む老後像の実現に内在する社会経済的な格差を指摘した。中年期にあるからこそ、明確に望む老後像を持ち主体的に取り組むには、生活の根幹をなす健康と収入が基盤となるのだろう。高齢期の Successful Aging や生活満足度と、「主観的健康状況」「主観的経済状況」の関連は、すでに明らかにされている(Lonard 2008, Britton & Shipley2008)。古谷野・安藤（2008）も、主観的幸福感の関連要因として「健康状況」と「経済状況」が様々な集団で同一の結果を得たと記している。第 4 の関連要因として「高齢者観」は、研究 1 においても望む老後像に影響する事が明らかにされており、Successful Aging(主観的幸福感)や Positive Ageing の関連要因として「高齢者観」が示されている（Chong et al.2006, Calasanti2015, Jopp et al.2015, Cracium et al.2015, Jopp et al.2016)。原田ら（2008）は、否定的な高齢者観と加齢に対する知識の低さの関連を示しており、「放棄」の人ほど否定的な高齢者観を持つ可能性がある。第 5 の関連要因である「自尊感

情」について、Kornadt & Rothermund(2012)は、現在の自己評価と将来の自己評価が関連しているとしており、若本（2010）も、中年期の人で老いへの自覚が高い人ほど自尊感情が低く、老いへの対処を放棄する傾向を見いだしていた。一見、望む老後像と自尊感情には関連がないと思われるかもしれないが、生活に追われ、疲弊してしまうと自分に自信が持てず、前向きにやっていこうとは思えなくなり、将来の事を考える余裕はなくなると想定される。つまり、「放棄」の人ほど自尊感情が低い可能性がある。

これらを踏まえて以下の仮説を立て、検証を行う。仮説 1 に、男性の方が「挑戦と活動」を、女性の方が「迷惑をかけたくない」「放棄」を志向する。仮説 2、仮説 3 に、健康状況や経済状況が良好な人ほど「挑戦と活動」を志向し、よくない人ほど「迷惑をかけたくない」「放棄」を志向する。仮説 4 に、肯定的な高齢者観を持つ人は「挑戦と活動」を、否定的な高齢者観を持つ人は「迷惑をかけたくない」「放棄」を志向する。仮説 4 に、「自尊感情」が高い人は「挑戦と活動」を志向し、「自尊感情」が低い人ほど「迷惑をかけたくない」「放棄」を志向する。

2)分析モデル

(1)基本的な枠組み

中年期の人の望む老後像の構成概念として示された、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」の関連要因を検討する。

⑵関連要因

中年期の人の望む老後像の関連要因として、「性」「主観的健康状況」「主観的経済状況」「高齢者観」「自尊感情」を試みる(図 30 参照)。

3)方法

⑴調査の対象と調査方法

研究 2 と同じ

⑵調査期間

調査は 2013 年 12 月初旬から 12 月末に実施した。

⑶分析項目

①従属変数

研究 2 で作成した、「挑戦と活動」の尺度、「迷惑をかけたくない」の尺度、「放棄」の尺度を用いた。

②独立変数

㋐属性と基本情報

属性として、性別、基本情報として、主観的健康状況、主観的経済状況を質問した。性別は、「1：男性」「2：女性」、主観的健康状況は、「1：良い」「2：まあ良い」

「3：普通」「4：あまり良くない」「5：良くない」という回答方法とした。主観的経済状況は、「1：まったくゆとりがない」「2：あまりゆとりがない」「3：標準的である」「4：ややゆとりがある」「5：ゆとりがある」という回答方法を用いた。性別、主観的健康状況、主観的経済状況については、質問項目の選択肢に割り振られた値を変数とした。

㋑FSA(原田ら 2005)

高齢者観を測る質問項目には、原田ら（2005）による日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版（以下、FSA と表記）を用いた。日本において高齢者観に関する研究は SD 法（Semantic Differential）による老人イメージの研究を中心に進められてきたが、日本においても否定的高齢者観（Ageism）を定量化し標準的に利用できる尺度として、小田(1992)の老年観の測定尺度や原田ら（2005）の FSA が挙げられる。小田(1992)は高齢者を対象としていたため、やや否定的方向に偏っているが原田ら(2005)が作成したものを用いた。

質問項目は、「1. 多くの高齢者はけちでお金を貯めている」「2. 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない」「3. 多くの高齢者は過去に生きている」「4.高齢者と会うと、ときどき目をあわせないようにしてしまう」「5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない」「6. 高齢者は、若い人の集まりによばれたときには感謝すべきだ」「7. もし、招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない」「8.個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない」「9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない」「10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない」「11. 高齢者はだれにも面倒をかけない場所に住むのが一番だ」「12. 高齢者との付き合いは結構楽しい（逆転項目）」「13. できれば高齢者と一緒に住みたくない」「14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」という 14 項目であり、項目の 4、5、6、9、10、11 の 6 項目は嫌悪・差別を示し、7、8、12、13、14 の 5 項目は回避を示し、1、2、3、の項目は誹謗を示す項目である。回答は、「5：そう思う」、「4：まあそう思う」、「3：どちらともいえない」、「2：あまりそう思わない」、「1：そう思わない」という 5 件法で行った。尺度の値が高いほど否定的高齢者観が強い事を示す。

確認のため因子分析を行った所、3 つの因子が見いだされた。因子のⅠは「2. 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない」「3. 多くの高齢者は過去に生きている」「4. 高齢者と会うと、ときどき目をあわせないようにしてしまう」「7. もし、招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない」「1.多くの高齢者はけちでお金を貯めている」「14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」の 6 項目で構成され、因子Ⅱは、「10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない」「6. 高齢者は、若い人の集まりによばれたときには感謝すべきだ」「11. 高齢者はだれにも面倒をかけ

ない場所に住むのが一番だ」「13. できれば高齢者と一緒に住みたくない」「9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない」の5項目で構成され、因子Ⅲは、「12. 高齢者との付き合いは結構楽しい（逆転項目)」「8. 個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない」「5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない」の3項目で構成されていた。見いだされた3つの因子は、原田ら（2005）の見いだした「回避」「誹謗」「差別・嫌悪」とは異なる項目によって構成されていたが、因子の内容は合致するものであった（表13参照)。そこで、因子Ⅰを「差別・嫌悪」、因子Ⅱを「誹謗」、因子Ⅲを「回避」とした。信頼性のCronbachのα係数は、「差別・嫌悪」（6項目）.782、「誹謗」（5項目）が.747、「回避」（3項目）が.627という値であり、信頼性を確認した。全ての項目が否定的高齢者観を示すため、高齢者観の変数として、逆転項目の値を反転した上で、14項目の選択肢に割り振られた値を単純加算し尺度とした。

㋒自尊感情(桜井2000)

自尊感情には、Rosenbergの自尊感情尺度（以下、自尊感情と表記）を用いた（日本語訳は桜井(2000)）。自尊感情（self-esteem）とは、自己に対する肯定的または否定的な態度を測るものであり(Rosenberg1965)、1965年に作成されてから、頻繁に使用されているものである。桜井(2000)は、質問項目の表現を時代に沿うものに変更し、より回答し易い工夫をした。

質問項目は「1. 私は自分に満足している」「2. 私は自分がだめな人間だと思う（逆転項目)」「3. 私は自分には見どころがあると思う」「4. 私はたいていの事がやれる程度には物事ができる」「5. 私には得意に思うことがない（逆転項目)」「6. 私は役立たずだと感じる（逆転項目)」「7. 私は自分が少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う」「8. もう少し自分を尊敬できたらと思う（逆転項目)」「9. 自分を失敗者だと思いがちである（逆転項目)」「10. 私は自分に対して、前向きの態度をとっている」であった。回答方法は、「4：はい」「3：どちらかといえばはい」「2：どちらかといえばいいえ」「1：いいえ」の4件法であった。尺度の値が高いほど自尊感情が高い事を示す。

確認のため因子分析を行ったところ、1つの因子で示された（表14参照)。Cronbachのα係数は、10項目で.873という値であり、信頼性を確認した。自尊感情を示す変数として、逆転項目の値を反転した上で、10項目の選択肢に割り振られた値を単純加算し自尊感情の尺度とした。

③変数同士の共線性の確認

相関の高い変数を分析に投入する事による共線性の問題を回避するために、変数同士の相関分析結果を示す。「自尊感情」と「経済状況」.372**、「自尊感情」と「健康状況」-.187*に関連が見られたが、高い値ではなかった（表15参照)。

(4)分析方法

IBM SPSS 統計解析ソフト 23 を用いた。

①相関分析

望む老後像の関連要因を見いだすために、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」と、「性」「FSA」「自尊感情」「主観的健康状況」「主観的経済状況」について相関分析を行った。相関係数は、1%もしくは 5%水準で有意であるとした。

②重回帰分析

望む老後像の関連要因を明らかにするために、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」を従属変数にし、「性」「FSA」「自尊感情」「主観的健康状況」「主観的経済状況」を独立変数として重回帰分析を行った。重回帰分析では、強制投入を行い、f 検定でモデルの有意確立を確認した後、t 値で独立変数の有意を 1%もしくは 5%水準で確認した。

(7) 倫理的配慮

研究 2 と同じ。

4) 結果

(1) 属性

基本属性について報告する。男性 71 人（57.3%）、女性 52 人（41.9%）、欠損値 1 人（0.8%）、合計 124 人であった。主観的健康状況については、良い 28 人（22.6%）、まあ良い 37 人（29.8%）、普通 36 人（29.0%）、あまり良くない 21 人（16.9%）、良くない 1 人（0.8%）であり、主観的経済状況については、まったくゆとりがない 16 人（12.9%）、あまりゆとりがない 31 人（25.0%）、標準的である 47 人（37.9%）、ややゆとりがある 21 人（16.9%）、ゆとりがある 8 人（6.5%）であった（表 16 参照）。

(1) 相関分析結果（表 15 参照）（**p<0.01、*p<0.05）

「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」には、有意な相関は見いだせなかった。「放棄」については、「FSA」.265**、「自尊感情」-.312**、「性別」.206*の相関が見いだされた。

(2) 重回帰分析結果（表 17 参照）

「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」には、有意なモデルは成立しなかった。

「放棄」の重回帰モデルの決定係数は.192、f 検定は 1%水準で有意であり、t 値が有意な独立変数は、「自尊感情」「FSA」が 1%水準で有意、「性」が 5%水準で有意であった。

5) 考察（図 31 参照）

「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」には、関連要因を見いだす事は出来なかったが、「放棄」に関しては、「性別」「FSA」「自尊感情」が関連要因として示された。

仮説 1 に、「性」との関連を挙げて想定した通り、「放棄」は女性が多い事が明らかとなった。中原・藤田（2007）は女性の方が安定と防衛を望むとしたが、それとは異なり「放棄」を望む結果となった。仮説 2、仮説 3 に、主観的健康状況や主観的経済

状況と「挑戦と活動」「放棄」には関連があるとしたが、直接的な関連は見いださせなかった。仮説 4 に、「高齢者観」との関連を挙げて想定した通り、「放棄」は否定的な高齢者観と関連していた。それは、原田ら（2008）の結果を支持するものであり、Chong et al.(2006)、Calasanti(2015)、 Jopp et al.(2015)、 Cracium et al.(2015)、Jopp et al.(2016) の結果を裏付けるものでもあった。仮説 5 に、「自尊感情」との関連を挙げた結果、「放棄」は自尊感情の低さと関連していた。それは、若本（2010）の結果を支持するものであり、Kornadt & Rothermund(2012)の結果を裏付けるものであった。さらに、「主観的健康状況」や「主観的経済状況」と「放棄」には直接的な関連は見いだせなかったが、自尊感情の低さと関連しており、それは、健康状況が良好でない状況や経済状況のゆとりのなさが間接的に「放棄」に影響をしている事を示すものである。つまり、杉澤（2015）や古谷野・安藤(2003)、Jang et al.(2009)、Jopp et al.（2015）の指摘するような、望む老後像の社会経済的格差の存在を裏打ちする結果とも位置付けられる。

以上のように、研究 3 の課題としては、望む老後像の関連要因を見いだす事を目的としたが、最終的には望む老後像を持たない人の特徴を示す結果となった。それは、望む老後像の様相ではなく、老後像を持つか持たないかに特徴が見いだされたとも考えられる。望む老後像を持たない人は、女性が多く、否定的な高齢者観を持ち、自尊感情が低いという特徴を見いだした。これらの特徴から、女性を中心に、肯定的な高齢者との接触や、人生を考える機会を創生する事によって、「放棄」の人が望む老後像を持つようになる可能性がある。

6）研究の限界

研究 2 に記した研究の限界に加え、本研究の限界の第 1 に、研究 1 で指摘した分析データの質に関連した限界がある。「挑戦と活動」と「迷惑をかけたくない」については、回収率が低く、その結果として要因として位置づけた「主観的健康状況」「主観的経済状況」「高齢者観」「自尊感情」の分散が小さくなった事から、これらの要因の効果が有意でなかった可能性がある。第 2 に、分析モデルの再検討も必要と思われる。「挑戦と活動」については、次のような要因も加える必要がある。高齢期における社会活動のレベルは高齢期以前の社会活動のレベルに影響される事、さらに心理面からみるならば中年期の活動への志向性も影響を与える事が指摘されている事から、分析モデルに中年期の社会活動性や活動への志向性を位置づける必要がある。「迷惑をかけたくない」については、私的扶養への期待や規範も要因として加える必要がある。すなわち、高齢期における経済的基盤や介護問題について、子どもに期待しない人、期待すべきではないという規範を有している人では、高齢期における望む老後像として「迷惑をかけたくない」という選択をする可能性がある。これらの要因の効果については、今後に残された課題とする。

5. 総合的考察

1) 本研究で解明した課題

緒言において、課題 1 に中年期を対象とした研究を行う事、課題 2 に中年期を対象として自由に望む老後像を語ってもらい、その内容を質的に分析し、その構成概念を明らかにする事、課題 3 に自由に語ってもらった内容を基に質問項目を作成し、信頼性妥当性を検証した中年期の人の望む老後像に関する尺度を作成し、望む老後像を明らかにする事、第 4 に望む老後像に関する内的な要因について検討する事を課題として挙げた。

課題 1 と課題 2 に対して、研究 1 では、中年期の人を対象として、自由に語ってもらった内容を分析し、「望む老後像を持つ」と「望む老後像は持たない」という構成概念を見いだし、「望む老後像を持つ」の下位概念として「挑戦と活動」「自立（家族に迷惑をかけない)」を明らかにした。さらに、その 2 つの下位概念にある望む老後像のヒエラルヒーを示した。望む老後像に影響する構成概念には、「高齢者観」と「生と死への信念」を見いだした。「望む老後像は持たない」という構成概念は、中年期の人に語ってもらった内容を質的に分析する事によって得られた新たな知見である。

課題 3 に対して、研究 2 では、研究 1 で自由に語ってもらった内容を基に「中年期の人の望む老後像に関する 3 つの尺度」を作成し、その尺度を用いて、「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」「放棄」を測る事を可能とした。それにより、研究 1 で示された「挑戦と活動」「迷惑をかけたくない」に存在する望む老後像のヒエラルヒーを明らかにし、「迷惑をかけたくない」は、ほとんどの人の望む老後像である事を示した。さらに課題 4 に対して、研究 3 では、望む老後像の関連要因を明らかにしようと試み、「放棄」は、女性が多く、否定的な高齢者観を持ち、自尊感情が低いという特徴を明らかとした。それは、どのような望む老後像を持つかというよりも、望む老後像を持つか持たないかの特徴を示すものであった。

2) 中年期における老後像研究の新しい展開の可能性

今後に残された課題の第 1 として、本研究で明らかにした望む老後像と実際の老後は同じではない可能性が大きい。理想的には、縦断研究によって中年期から高齢期までの老後像がどう変化していくのか、それに伴って老後のための計画がどう変化し、結果としてどのような老後が実現されたのかを追う事が望ましい。あるいは、最低限、中年期の老後像と実現された老後がどの程度違うのかを把握する必要があるだろう。それを把握した上で、中年期に老後像を持つ事によって老後はどう異なるのかを追究する事が次の課題として浮かび上がる。

今後に残された課題の第 2 として、本研究では 45 歳から 55 歳というコホートを対象としたが、他のコホートはどのような老後像を描いているのか、また、その関連要因は

何かといった点は明らかには出来なかった。他のコホートについても検討し、その関連要因を明らかにすべきである。

今後に残された課題の第 3 として、社会経済状況の違いが、中年期の人の望む老後像にどのように影響していくのかを追究すべきである。本研究では、経済的状況が全国平均よりやや低い自治体を対象としたが、全国平均よりも高い自治体やかなり低い自治体を対象として、望む老後像にどのような違いがあるのか、そしてその関連要因は異なっているのかを追究し、望む老後像に内在する社会経済的格差の影響を解明する。

今後に残された課題の第 4 として、色々な介入を試みて、その効果を研究する事を提案したい。効果としては、次のような事が考えられる。一つには、望む老後像を持つ事は個人に有益となる可能性を持つ。望む老後像の持ちにくい人々の自尊感情を改善する事によって望む老後を実現する可能性を増やせるかもしれない。なぜなら、家事や仕事に疲弊し、自分の事を省みる事も将来も描けない人は、経済状況も健康状況も良くない人たちであった。研究 1 のインタビューの際、「仕事と家事に精一杯で将来を考える余裕がない」と 3 名の女性が語っていたが、それは、内閣府の調査（2014）で示された老後を意識しない理由の「現在の収入が少なく将来の事を考える余裕がない」「家事や育児が忙しくて将来の事を考える時間がない」という結果と重なるものであった。さらに、この事は社会的な効果を持つかもしれない。「将来を考える余裕のない人は、社会経済的な状況が悪い人が多いと考えられる。その人々が、中年期の内に望む老後像を持つように改善でき、老後準備に取り組み、より良い老後の実現が出来たとすれば、それは社会的な格差を是正できたという事になる。Jang et al.(2008)は、健康増進キャンペーンから社会的格差を排除していく事が出来ると示唆したが、望む老後像を持つ事も、これと同じように、格差を是正できるかどうかの効果の研究も待たれる。

そのためにも、今後に残された課題の第 1、第 2、第 3 を踏まえた上で、どのような介入内容がどの年齢層に効果的であるかを研究していく必要もある。本研究では、中年期の人への介入研究として、女性を中心とする事が効果的であるという事が明らかにされた。先行研究では、肯定的高齢者観と否定的高齢者観の双方が望む老後像に影響を与えるとの報告がある（Jopp et al.2016,Clasanti2015,Jopp et al.2016)。本研究の質的分析では、肯定的高齢者観の肯定的な影響だけでなく、否定的高齢者観の影響の仕方については、自分もそうなるかもしれないから敢えて考えたくないといった老後像を放棄していく否定的な方向と、そうなりたくないから自分は迷惑をかけないようにしたいという肯定的な方向の 2 つの影響の型が見受けられた。つまり、介入の際には、こうなりたいという高齢者像だけを示すのでなく、加齢に伴う心と体の変化や、こうなりたくない（認知症や病気）という像として挙げられた高齢者に多い病気（認知症・高齢期のうつ病）についても示し、その効果を測るべきである。介入の最後には、自分の望む老後像とはどのようなものなのか、そしてその老後像に向かって自分はどのように取り組んでいくかを考えてもらう時間を持つ事の効果も検討すべきだろう。

3)老年学におけるライフコースの視点の導入

老年学分野の研究には、高齢者に関しての研究や高齢者を看護・介護する専門職の研究が多く、中年期に対しての研究の蓄積は緒言でも示したように不十分である。Jung（1979）は、人生を太陽の動きにたとえ、中年期以降を「人生の午後」と称し、人生の正午を過ぎた転換期は肉体的な変化よりも心の変化が顕著であるとした上で、多くの人が将来の生活とその必要事項についての予備知識などの「心の準備」をしないで人生後半を歩き出す事に対して、40代を過ぎた人たちのための高等教育の必要性を指摘した。Jung(1979)の指摘した、人生後半のための「心の準備」こそ老年学の果たすべき役割である。Lachman(2001)も、中年期における老後への計画が中年期危機の状態を調整するとしているように、老年学においてもライフコースの視点を導入して、幅広い層を対象とした市民講座やセミナーなどで、老年学を広めていく必要がある。

さらに視野を広げるならば、中学校や高等学校の教育においても、成長という事に焦点があてられ成人するまでの学習で終わっている。その後の中年期、老年期についても、老年学の成果を活かし、生涯発達として教育の視野に入れていく事が必要ではないだろうか。

6. 本研究の総括

本研究の新規性は以下のように要約できる。質的研究から導き出された類型をもとに中年期の人が望む老後像の測定尺度を新しく開発したこと、質的研究で解明された中年期の人が望む老後像は結果として高齢期の人が望む老後像と類似していること、望む老後像をもたない人の存在も明らかにされ、この類型には自尊感情と高齢者に対する否定的な態度という心理的な要因が影響していることが解明された点である。

謝辞

本論文の作成のみならず、研究の進め方、まとめ方など、未熟な私の為に、長きにわたり助言とご指導を下さった桜美林大学大学院老年学研究科特任教授直井道子先生に心より感謝申し上げます。そして、主査としてご指導いただきました桜美林大学大学院老年学研究科教授杉澤秀博先生には、丁寧なご指導と激励を頂きました。深く御礼申し上げます。桜美林大学大学院老年学研究科教授長田久雄先生、神戸大学名誉教授小田利勝先生には、何度も貴重なご指摘とご助言を頂きました。心より御礼申し上げます。

本論文の研究 1 のインタビューには、多くの友人が協力してくれました。深く感謝申し上げます。分析の際には、分析の客観性と妥当性を確認するために、臨床心理士である内山愛子さんにも分析をしていただきました。大変な作業を快く引き受けて下さった事に、心から御礼申し上げます。また、研究 1 には、桜美林大学加齢・発達研究所の研究助成を頂きました。深謝します。本論文の研究 2 には、日野市選挙管理委員会の皆様のご協力を頂きました。また、質問紙を返信して下さった 124 名の市民の方々に心から感謝申し上げます。研究 1 でのインタビュー会場の提供及び、研究 2 の郵送法を採用するにあたっては、日野郵便局の方々のご支援を頂きました。研究を遂行するにあたって、大きな力となりました。有難うございました。

桜美林大学大学院　老年学研究科、杉澤ゼミ、長田ゼミの学友には、ゼミにて貴重な意見を頂いただけでなく、会うたびに温かい励ましをも頂き、それが研究の大きな支えとなりました。老年学とは異なる分野ながら、助言や激励を下さった武蔵野大学大学院の恩師、種村健二朗先生、田中教照先生、西本照真先生、ケネス田中先生に改めて御礼申し上げます。学友である、常世田朋子さん、高橋ゆかりさん、稲垣安美さんは公私にわたり支えて下さいました。ここに感謝申し上げます。東京都健康長寿医療センター研究所の社会参加と地域保健研究チームの藤原佳典先生をはじめ、チームの皆様からの助言や励ましが大きな力となりました。

最後に、本論文の完成を陰ながら支えてくれた主人と 2 人の子供達に感謝します。

引用文献

- Atchley R.C.: A Continuity Theory of Normal Aging. The gerontologist,29(2):183-190(1989).
- Britton A., Shipley M.,Singh-Manoux A., et al.: Successful Aging ; The Contribution of Early-life and Midlife Risk Factors. Journal of the American Geriatrics Society,56(6),1098-1105(2008).
- Calasanti T.: Combating Ageism: How Successful is Successful Aging The Gerontologist(Advance Access publication),1-9(2015).
- Chong A.M., Ng S., Woo J., et al.: Positive Ageing; the views of middle-aged and older adults in Hong Kong. Ageing & Society,26,243-265(2006).
- Craciun C., Gellert P., Flick U.: Aging Precarious Times; Positive Views on Aging in Middle-Aged Germans with Secure and Insecure Pension Plans. Ageing International,40, 201-218(2015).
- Dabis H., Yates J.: Successful navigation of the stormy seas;What factors lead to a successful transition from the quarterlife crisis? The Coaching Psychologist,10(1),17-24(2014).
- 原田謙,杉澤秀博,杉原陽子ほか:日本語版 Fraboni エイジズム尺度（FSA）短縮版の作成；都市部の若年男性におけるエイジズムの測定. 老年社会科学,26（3）,308-319(2005）.
- 原田謙,杉澤秀博,柴田博:都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因. 老年社会科学, 29(4), 485-492(2008).
- Havighurst R.J.: Successful Aging. The Gerontologist, 1(1),8－13(1961).
- 日野市 HP Aug.05,2013、Oct.01,2013 アクセス http://www.city.hino.lg.jp/index.cfm/196,17582,347,1996,html
- Jang S., Choi Y., Kim D.: Association of Socioeconomic Status with Successful Ageing; Differences in The Components of Successful Ageing. Journal of Biosocial Science,41,207-219(2009).
- Jopp D.S., Wozniak D., Damarin A.K., et al.: How Could Lay Perspectives on Successful Aging Complement Scientific Theory? ; Findings From a U.S. and a German Life-Span Sample. The Gerotologist,55(1),91-106(2015).
- Jopp D.S., Jung S., Damarin A.K., et al.: Who Is Your Successful Aging Role Model? Journals of Gerontology: Social Sciences, Advance Access publication,1-11(2016).
- Jung C.G.（鎌田輝夫訳）:人生の転換期. 現代思想,4,42-55（1979）.
- 川喜多二郎：KJ 法入門コーステキスト.非売品,20,KJ 法本部・川喜多研究所,東京

(1997).

- 児玉好信,古谷野亘,岡村清子ほか:都市壮年における望ましい老後の生活像.老年社会科学,17(1),66－73(1995).
- 児玉好信:都市の老勤労者後に対する態度構造に関する研究.共立女子短期大学生活科学科紀要,34, 37-42(1991).
- 国立安全保障人口問題研究所 HP　Aug.05,2013 アクセス http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2014.asp?fname=T02-03.htm
- 小松光代,岡山寧子,福間和美ほか：中高年の考える老後の生活.京都府立医科大学医療技術短期大学紀要,10,75-84（2000）.
- Kornadt A.E. & Rothermund K.: Internalization of Age Stereotypes Into the Self-Concept via Future Self-Views; A General Model and Domain-Specific Differences. Psychology and Aging, 27(1),164-172(2012).
- 小手川良江,上村朋子,本田多美枝:M 市在住の中高年の生活実態とサクセスフル・エイジング,日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report,3,56－67(2005).
- 厚生労働省 HP　Jan.06,2016 アクセス　http://www.kenkounippon21.gr.jp/
- 厚生労働省 HP より PDF をダウンロード　Mar.14,2016 アクセス http://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/heart/yk-081.html
- 厚生労働省 HP より PDF をダウンロード　Dec02,2016　アクセス http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life15/dl/life15-14.pdf
- 古谷野亘,井上勝也,岡本多喜子ほか:都市壮年における老後の生活像と準備行動(1);老後の生活像.老年社会科学,7,97－108(1985).
- 古谷野亘,長田久雄:実証研究の手引き;調査と実験の進め方・まとめ方.第 1 版,ワールドプランニング,東京（1992）.
- 古谷野亘,安藤孝敏:改訂・新社会老年学; シニアライフのゆくえ.第 2 版,ワールドプランニング,東京(2008).
- 黒田文:サクセスフル・エイジングに関する再考；プロセス指向性を求めて.社会文化論集.6,53-64(2010).
- Lachman M.E.: Handbook of Midlife Development. John Wiley & Sons. Inc. New York, 493－498(2001).
- Leonard W.M.: Successful Aging; An Elaboration of Social and Psychological Factors. The International Journal of Aging and Human Development,14(3),223-232(1982).
- Lewis J.P.: The Importance of Optimism in Maintaining Healthy Aging in Rural Alaska. Qualitative Health Research, 23(11), 1521-1527(2013).
- Maslow A.H.:人間性の心理学.第 10 版,産業能率短期大学出版部,東京(1971).

- 村山くみ, 嘉村藍,大月和彦ほか:中高年者の生活状況と主観的健康観の関連について.松本短期大学紀要,57,57-67(2008).
- 内閣府:高齢期に向けた「備え」に関する意識調査. 内閣府政策統括官(2014).
- 内閣府 HP Aug.11,2016 アクセス
http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/keizai-jinkou_data.html
- 中原純,藤田綾子:向老期世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係.老年社会科学,29(1),30－36(2007).
- 難波淳子:中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察; 語られたライフヒストリーの分析から.社会心理学研究,15(3),164-177(2000).
- NIRA HP から PDF をダウンロード Dec.26,2016 アクセス
http://www.nira.or.jp/pdf/0901areport.pdf
- 西田友子,舟橋博子,榊原久孝:中年期における特定健康診査の受診行動と関連する要因の検討.厚生の指標,61(8),14-20(2014).
- 小田利勝:高齢者の老年観の測定尺度と分析モデル.徳島大学社会科学研究紀要,5, 159-180 (1992) .
- 小田利勝:いまの高齢者は老後の準備を何歳頃に始めたか.神戸大学発達科学部研究紀要,11(1):161－172(2003).
- 小田利勝:サクセスフル・エイジングの研究. 初版,学文社(2004).
- 岡本祐子:中年期の自我同一性に関する研究.教育心理学研究,33(4),295-306(1985).
- Rosenberg M.: Society and the adolescent self-image. Princeton University Press, New Jersey(1965).
- 嵯峨座晴夫:エイジングの人間科学,初版,学文社,東京(1993).
- 桜井茂男:ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討.発達臨床心理学研究,12,65-71(2000).
- Strawbridge W.J., Wallhagen M.I., Cohen R.D.: Successful Aging and Well-Being; Self-Rated Compared With Rowe and Kahn. The Gerontologist,42(6),727-733(2002).
- 菅知絵美,唐澤真弓:幸福感と健康の文化的規定因; 中高年のコントロール感と関係性からの検討. 東京女子大学紀要論集,59(1),195-220,(2008).
- 杉澤秀博:東京都における中年期および老年期の自殺死亡率の地域差,社会老年学,30,37-46(1989).
- 杉澤秀博:ミドル期の危機と発達;人生の最終章までのウェルビーイング, お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム誕生から死までの人間科学第 5 巻,初版,金子書房,東京(2008).
- 杉澤秀博:サクセスフル・エイジングとは何か;高齢期の生き方のモデル.TASC

MONTHLY,476,12-17(2015).

- 鈴木征男,小宮信夫,西浦康一郎ほか：ライフデザイン【人生設計】の現状とその意識(1997年調査)下.LDI REPORT,12,5-38(1997).
- Troutman-Jordan M., Staples J.: Successful Aging From the Viewpoint of Older Adults. Research and Theory for Nursing Practice, An International Journal,28(1),87-108(2014).
- 若本純子：中年期の老いの自覚と対処における「関心」向け方による相違.教育心理学研究,58, 151-162(2010).
- Wang Y.T., Lin W.I.: Successful ageing; The case of Taiwan, Australasian on Ageing.31(3),141-146(2012).
- 安田三郎・原純輔：社会調査ハンドブック.第3版,株式会社有斐閣,東京(1987).

表1　中年期の人が望む老後像の先行研究

研究者	年度	場所	研究の枠組み	年齢	質問項目	望む老後像	関連要因	研究方法
古谷野ら	1985	都市	老後生活像に内在する次元を明らかにする	30-59	8つのジレンマへの17の反応	「家族主義と個人の独立」「隠居と参加」の2軸	「家族主義と個人の独立」に年齢と学歴「隠居と参加」に性	留め置き法
児玉	1991	都市	来るべき高齢社会への態度	不明	現在の高齢者に対する見方及び自分の老後における社会の状況や生活の在り方24項目	「同居と別居」「同調志向と自己主張」の2軸		民間企業4社への留め置き調査
児玉ら	1995	都市	日本人に特有の幸福な老いの構造を明らかにする	45-64	4つの領域の41項から16項目を分析対象とした	「安定志向と変化志向」「同調志向と自己主張」の2軸	同調志向と自己主張にのみ年齢・学齢	訪問面接法
小手川ら	2005	地方都市の郊外	どのような老後像を理想としているのか	35-64	14項目を作成	自立・心身ともに健康に豊かな老後を送りたい		郵送法
中原・藤田	2007		継続性理論の検証	50-64	児玉らの13項目	変化・挑戦的な生き方	性・年齢	郵送法

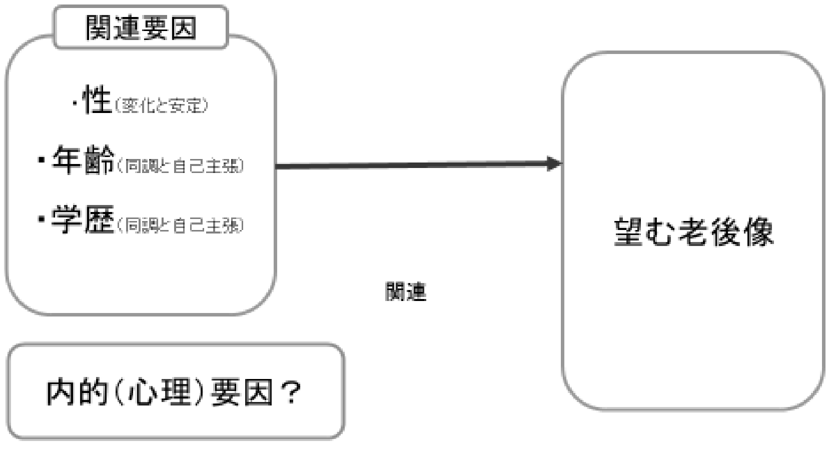

関連要因
・性(変化と安定)
・年齢(同調と自己主張)
・学歴(同調と自己主張)
関連
望む老後像
内的(心理)要因？
明らかにされている事

図1 分析モデル

表2　対象者リスト

対象者	年齢	仕事	婚姻	子の有無	対象者	年齢	職業	婚姻	子の有無
M1	53	会社員	既婚	有	F2	47	主婦	既婚	有
M2	47	会社員	既婚	無	F3	47	会社員	既婚	有
M3	45	会社員	既婚	無	F4	47	パート･アルバイト	既婚	有
M4	47	会社員	既婚	有	F5	47	パート･アルバイト	既婚	有
M5	47	会社員	未婚	無	F6	53	パート･アルバイト	既婚	有
M7	47	会社員	既婚	無	F7	47	契約社員	既婚	有
M9	45	会社員	既婚	有	F8	52	会社員	既婚	有
M10	52	会社員	既婚	有	F9	50	パート･アルバイト	既婚	有
					F11	46	パート･アルバイト	既婚	無

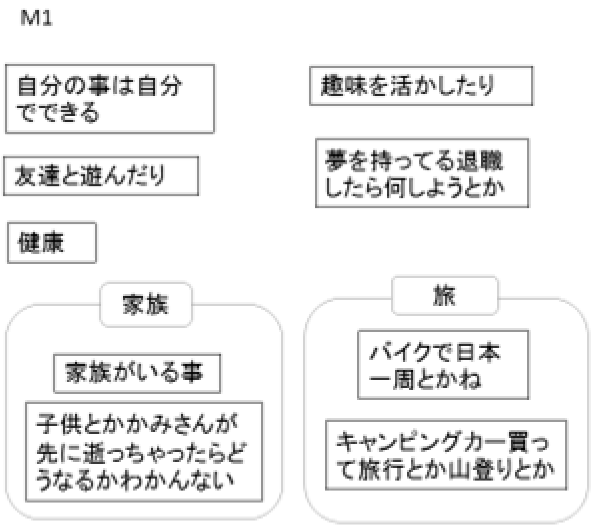

M1
自分の事は自分でできる
趣味を活かしたり
友達と遊んだり
夢を持ってる退職したら何しようとか
健康
家族
家族がいる事
子供とかかみさんが先に逝っちゃったらどうなるかわかんない
旅
バイクで日本一周とかね
キャンピングカー買って旅行とか山登りとか

図2　概念図M1

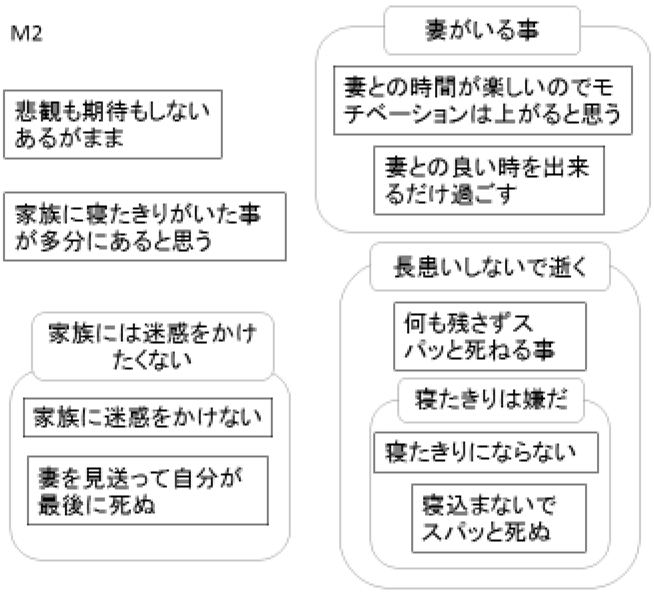
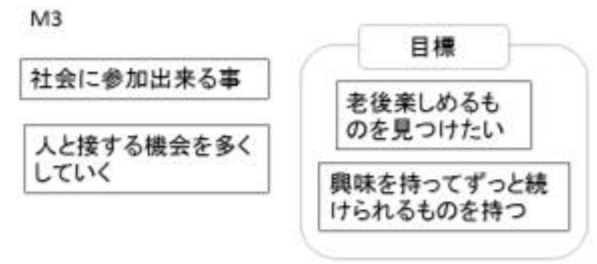
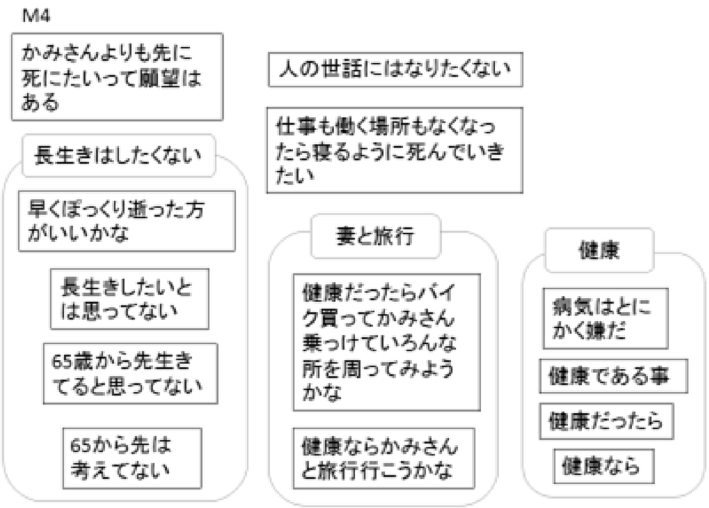

M2
悲観も期待もしない
あるがまま
家族に寝たきりがいた事
が多分にあると思う
家族には迷惑をかけ
たくない
家族に迷惑をかけない
妻を見送って自分が
最後に死ぬ
妻がいる事
妻との時間が楽しいのでモ
チベーションは上がると思う
妻との良い時を出来
るだけ過ごす
長患いしないで逝く
何も残さずス
パッと死ねる事
寝たきりは嫌だ
寝たきりにならない
寝込まないで
スパッと死ぬ

図3　概念図M2


M3
社会に参加出来る事
人と接する機会を多くしていく
目標
老後楽しめるものを見つけたい
興味を持ってずっと続けられるものを持つ
図4 概念図M3


M4
かみさんよりも先に死にたいって願望はある
人の世話にはなりたくない
仕事も働く場所もなくなったら寝るように死んでいきたい
長生きはしたくない
早くぽっくり逝った方がいいかな
長生きしたいとは思ってない
65歳から先生きてると思ってない
65から先は考えてない
妻と旅行
健康だったらバイク買ってかみさん乗っけていろんな所を周ってみようかな
健康ならかみさんと旅行行こうかな
健康
病気はとにかく嫌だ
健康である事
健康だったら
健康なら
図5　概念図M4

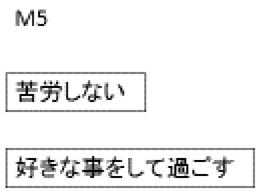


図6 概念図M5

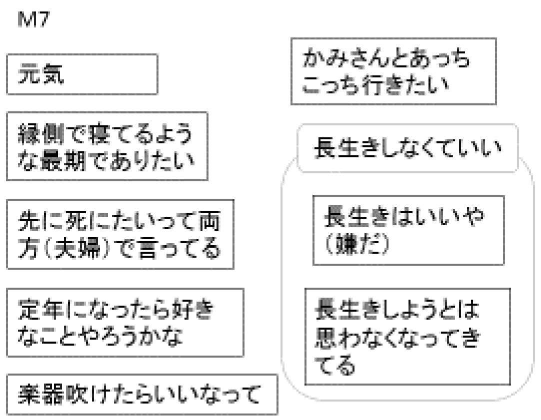

M7
元気
縁側で寝てるような最期でありたい
先に死にたいって両方（夫婦）で言ってる
定年になったら好きなことやろうかな
楽器吹けたらいいなって
かみさんとあっちこっち行きたい
長生きしなくていい
長生きはいいや（嫌だ）
長生きしようとは思わなくなってきてる

図7　概念図M7

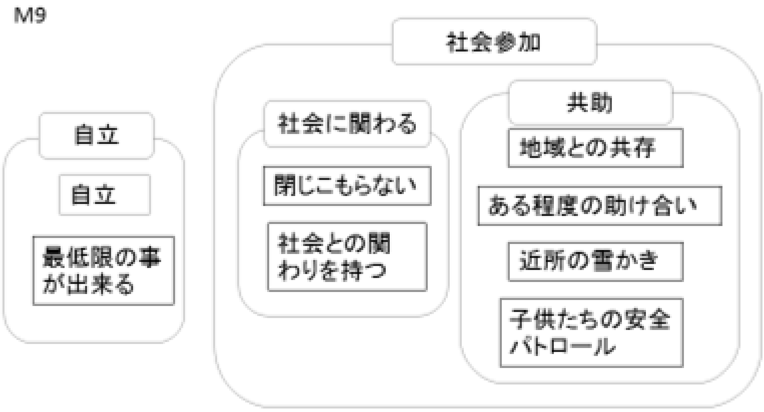

M9
社会参加
自立
自立
最低限の事が出来る
社会に関わる
閉じこもらない
社会との関わりを持つ
共助
地域との共存
ある程度の助け合い
近所の雪かき
子供たちの安全パトロール

図8 概念図M9

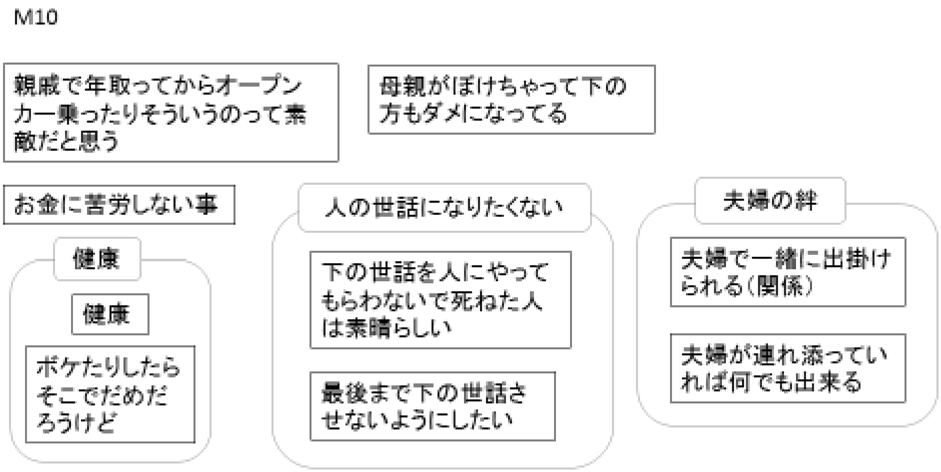

M10
親戚で年取ってからオープンカー乗ったりそういうのって素敵だと思う
母親がぼけちゃって下の方もダメになってる
お金に苦労しない事
健康
健康
ボケたりしたらそこでだめだろうけど
人の世話になりたくない
下の世話を人にやってもらわないで死ねた人は素晴らしい
最後まで下の世話させないようにしたい
夫婦の絆
夫婦で一緒に出掛けられる（関係）
夫婦が連れ添っていれば何でも出来る

図9 概念図M10

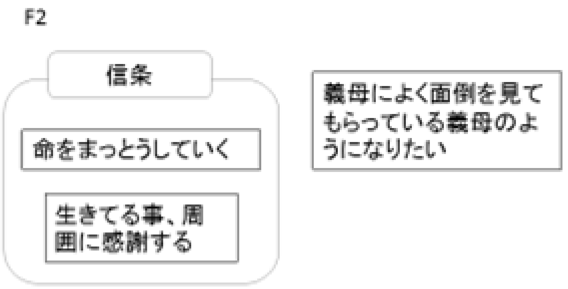

F2
信条
命をまっとうしていく
生きてる事、周囲に感謝する
義母によく面倒を見てもらっている義母のようになりたい

図10　概念図F2

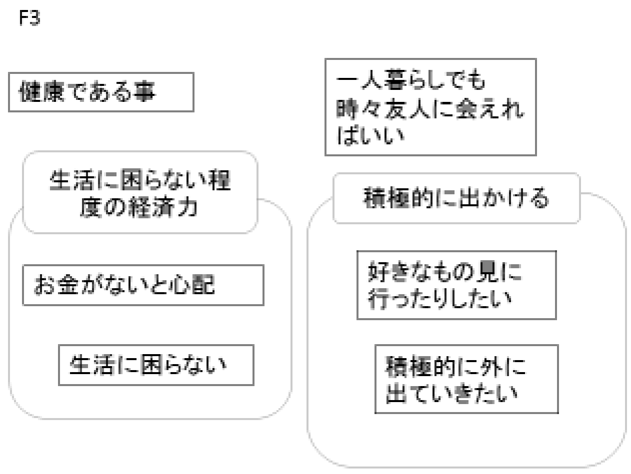

F3
健康である事
一人暮らしでも
時々友人に会えれ
ばいい
生活に困らない程
度の経済力
お金がないと心配
生活に困らない
積極的に出かける
好きなもの見に
行ったりしたい
積極的に外に
出ていきたい

図11 概念図F3

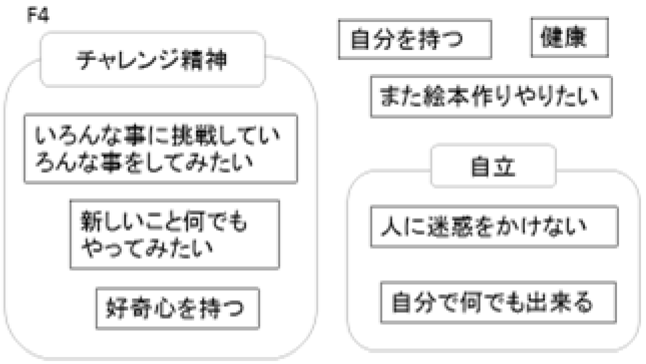

F4
チャレンジ精神
いろんな事に挑戦していろんな事をしてみたい
新しいこと何でもやってみたい
好奇心を持つ
自分を持つ
健康
また絵本作りやりたい
自立
人に迷惑をかけない
自分で何でも出来る

図12　概念図F4

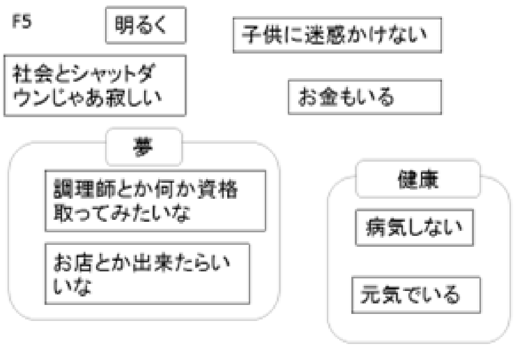

F5
明るく
子供に迷惑かけない
社会とシャットダウンじゃあ寂しい
お金もいる
夢
調理師とか何か資格取ってみたいな
お店とか出来たらいいな
健康
病気しない
元気でいる

図13　概念図F5

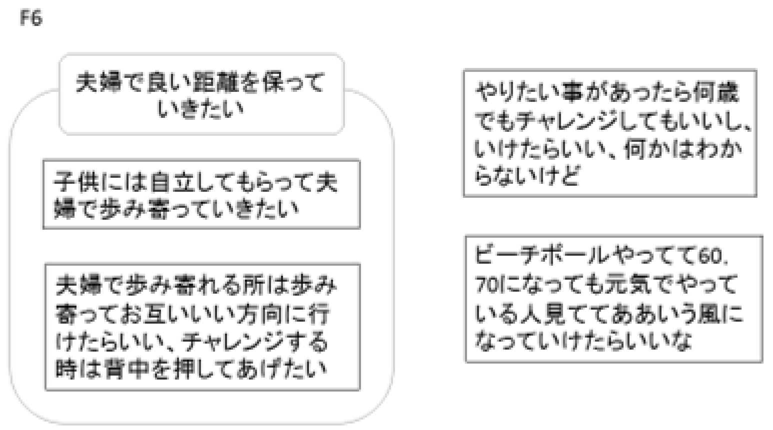

F6
夫婦で良い距離を保っていきたい
子供には自立してもらって夫婦で歩み寄っていきたい
夫婦で歩み寄れる所は歩み寄ってお互いいい方向に行けたらいい、チャレンジする時は背中を押してあげたい
やりたい事があったら何歳でもチャレンジしてもいいし、いけたらいい、何かはわからないけど
ビーチボールやってて60.70になっても元気でやっている人見ててああいう風になっていけたらいいな

図14　概念図F6

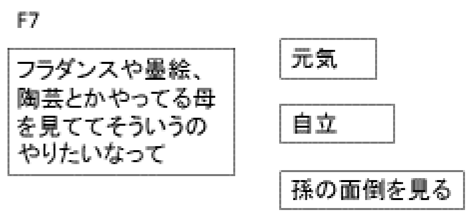


図15　概念図F7

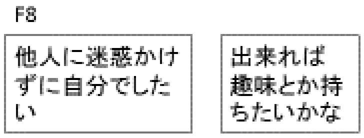


図16　概念図F8

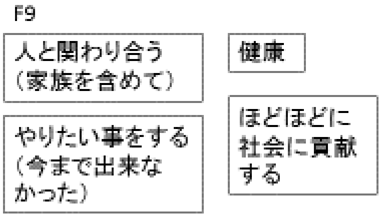


図17　概念図F9

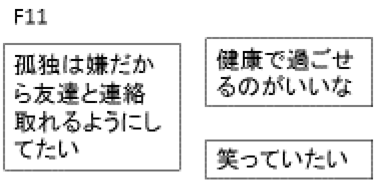


図18　概念図F11

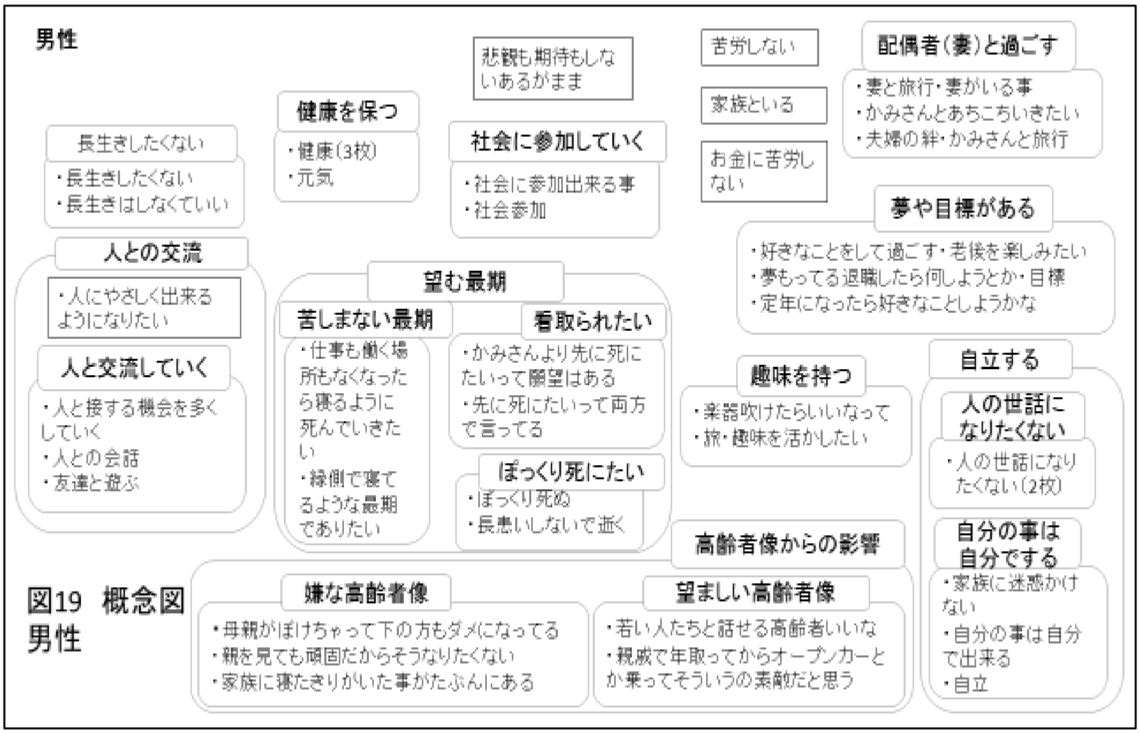
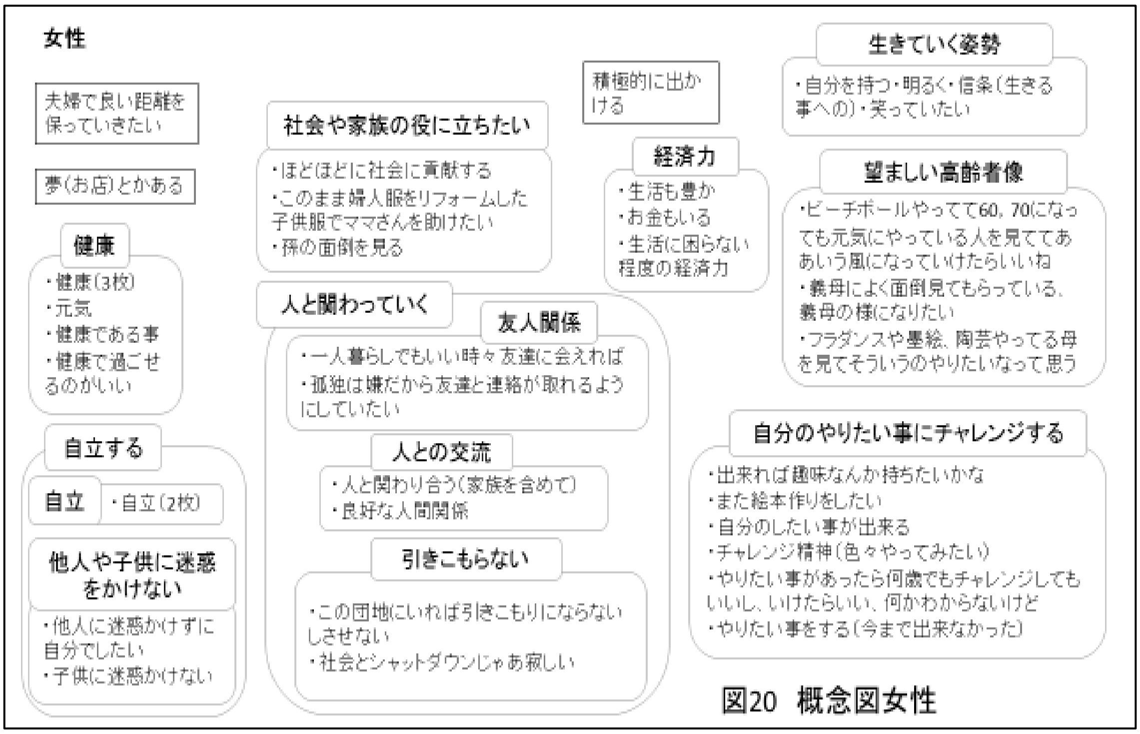
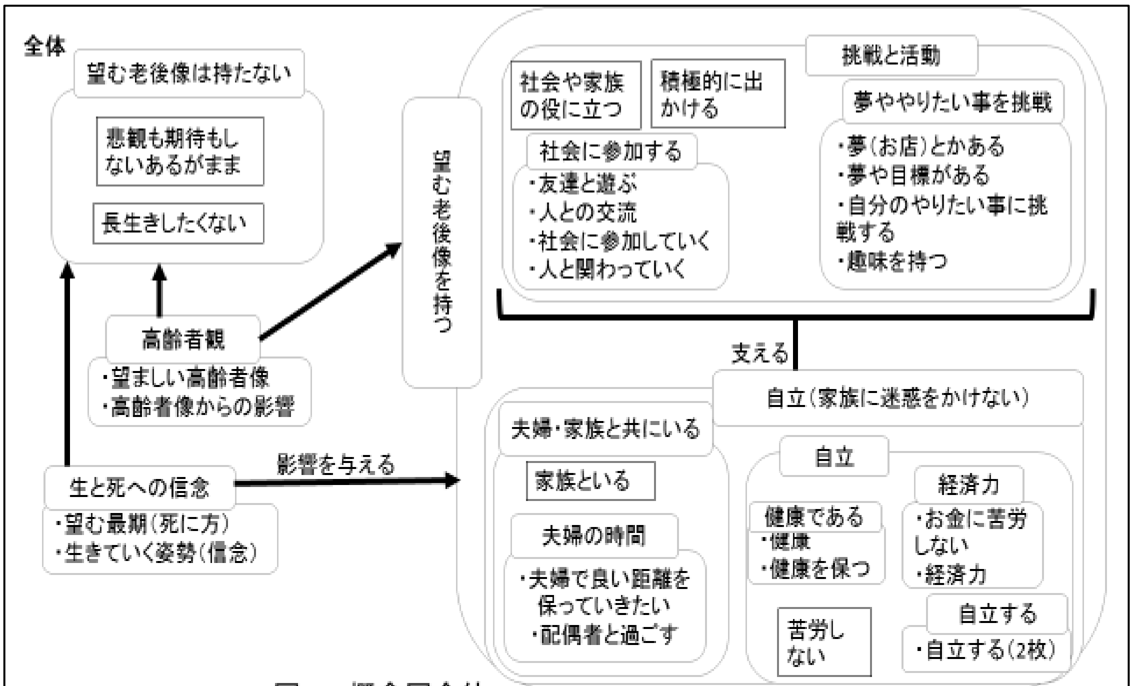
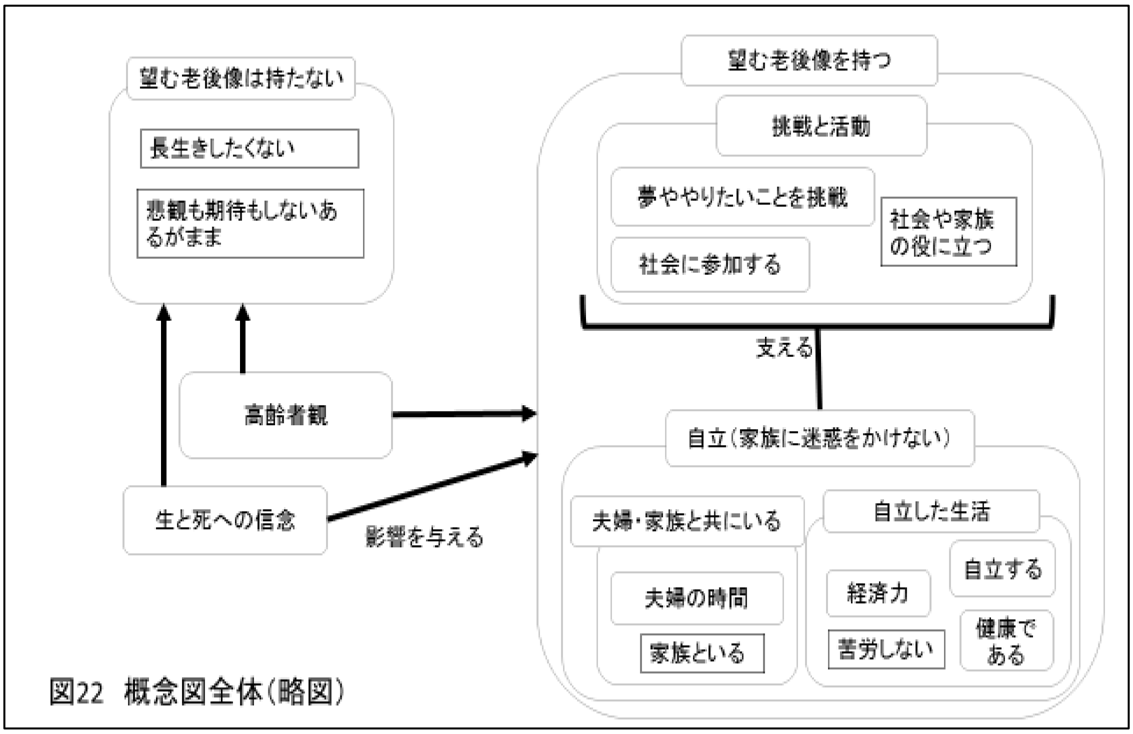

男性
悲観も期待もしないあるがまま
苦労しない
配偶者(妻)と過ごす
・妻と旅行・妻がいる事
・かみさんとあちこちいきたい
・夫婦の絆・かみさんと旅行
家族といる
お金に苦労しない
健康を保つ
・健康(3枚)
・元気
社会に参加していく
・社会に参加出来る事
・社会参加
長生きしたくない
・長生きしたくない
・長生きはしなくていい
夢や目標がある
・好きなことをして過ごす・老後を楽しみたい
・夢もってる退職したら何しようとか・目標
・定年になったら好きなことしようかな
人との交流
・人にやさしく出来るようになりたい
人と交流していく
・人と接する機会を多くしていく
・人との会話
・友達と遊ぶ
望む最期
苦しまない最期
・仕事も働く場所もなくなったら寝るように死んでいきたい
・縁側で寝てるような最期でありたい
看取られたい
・かみさんより先に死にたいって願望はある
・先に死にたいって両方で言ってる
ぽっくり死にたい
・ぽっくり死ぬ
・長患いしないで逝く
趣味を持つ
・楽器吹けたらいいなって
・旅・趣味を活かしたい
自立する
人の世話になりたくない
・人の世話になりたくない(2枚)
自分の事は自分でする
・家族に迷惑かけない
・自分の事は自分で出来る
・自立
高齢者像からの影響
嫌な高齢者像
・母親がぼけちゃって下の方もダメになってる
・親を見ても頑固だからそうなりたくない
・家族に寝たきりがいた事がたぶんにある
望ましい高齢者像
・若い人たちと話せる高齢者いいな
・親戚で年取ってからオープンカーとか乗ってそういうの素敵だと思う

図19 概念図
男性


女性
夫婦で良い距離を保っていきたい
夢(お店)とかある
健康
・健康(3枚)
・元気
・健康である事
・健康で過ごせるのがいい
自立する
自立
・自立(2枚)
他人や子供に迷惑をかけない
・他人に迷惑かけずに自分でしたい
・子供に迷惑かけない
社会や家族の役に立ちたい
・ほどほどに社会に貢献する
・このまま婦人服をリフォームした子供服でママさんを助けたい
・孫の面倒を見る
人と関わっていく
友人関係
・一人暮らしでもいい時々友達に会えれば
・孤独は嫌だから友達と連絡が取れるようにしていたい
人との交流
・人と関わり合う(家族を含めて)
・良好な人間関係
引きこもらない
・この団地にいれば引きこもりにならないしさせない
・社会とシャットダウンじゃあ寂しい
積極的に出かける
経済力
・生活も豊か
・お金もいる
・生活に困らない程度の経済力
生きていく姿勢
・自分を持つ・明るく・信条(生きる事への)・笑っていたい
望ましい高齢者像
・ビーチボールやってて60, 70になっても元気にやっている人を見ててあいう風になっていけたらいいね
・義母によく面倒見てもらっている、義母の様になりたい
・フラダンスや墨絵、陶芸やってる母を見てそういうのやりたいなって思う
自分のやりたい事にチャレンジする
・出来れば趣味なんか持ちたいかな
・また絵本作りをしたい
・自分のしたい事が出来る
・チャレンジ精神(色々やってみたい)
・やりたい事があったら何歳でもチャレンジしてもいいし、いけたらいい、何かわからないけど
・やりたい事をする(今まで出来なかった)
図20 概念図女性


全体
望む老後像は持たない
悲観も期待もしないあるがまま
長生きしたくない
高齢者観
・望ましい高齢者像
・高齢者像からの影響
生と死への信念
・望む最期（死に方）
・生きていく姿勢（信念）
影響を与える
望む老後像を持つ
挑戦と活動
社会や家族の役に立つ
積極的に出かける
社会に参加する
・友達と遊ぶ
・人との交流
・社会に参加していく
・人と関わっていく
夢ややりたい事を挑戦
・夢（お店）とかある
・夢や目標がある
・自分のやりたい事に挑戦する
・趣味を持つ
支える
自立（家族に迷惑をかけない）
夫婦・家族と共にいる
家族といる
夫婦の時間
・夫婦で良い距離を保っていきたい
・配偶者と過ごす
自立
健康である
・健康
・健康を保つ
経済力
・お金に苦労しない
・経済力
苦労しない
自立する
・自立する（2枚）
図21　概念図全体


望む老後像は持たない
長生きしたくない
悲観も期待もしないあるがまま
高齢者観
生と死への信念
影響を与える
望む老後像を持つ
挑戦と活動
夢ややりたいことを挑戦
社会に参加する
社会や家族の役に立つ
支える
自立（家族に迷惑をかけない）
夫婦・家族と共にいる
夫婦の時間
家族といる
自立した生活
経済力
自立する
苦労しない
健康である
図22　概念図全体（略図）

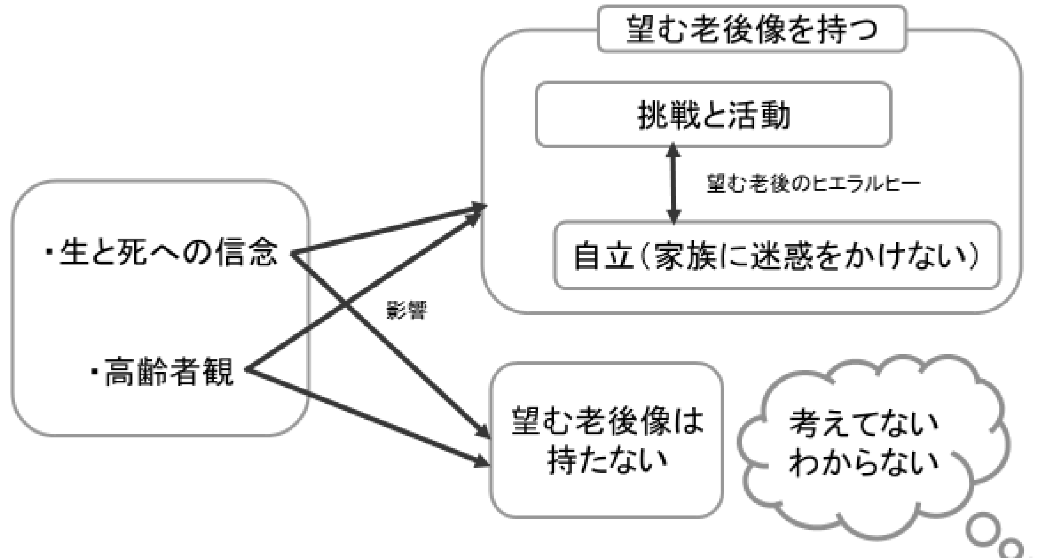

望む老後像を持つ
挑戦と活動
望む老後のヒエラルヒー
自立（家族に迷惑をかけない）
・生と死への信念
・高齢者観
影響
望む老後像は
持たない
考えてない
わからない
明らかにされた事

図23　研究1　まとめ

表3　質問項目作成のプロセス

項目	想定される構成概念	インタビューからの表札(元ラベル数)	引用
新しい事を始めたい	変化・挑戦	新しいこと何でもやってみたい(11)	児玉ら(1995)が作成した16項目のうち中原・藤田(2007)が見出した3因子
いろいろなことをやってみたい		色んな事に挑戦して色んな事をしてみたい(2)	
変化のある暮らしをしたい		キャンピングカー買って旅行(類似発言)(3)	
人間関係を広げたい		人と社会に関わる(5)人との交流(5)	
若い人とできるだけ付き合うようにしたい			
努力してがんばるような生き方をしたい			
社会のために尽くしたい		社会に貢献する(5)	
人間関係のわずらわしさを避けたい	安定・防衛		
近所付き合いのわずらわしさを避けたい			
つらいことは避けるようにしたい			
気にあった仲間とだけつきあいたい			
周囲に合わせて行動したい	同調		
何事につけ人の意見に従うようにしたい			
	望む老後像は持たない	長生きしたくない(6)	
		考えていない・わからない(10)	
		悲観も期待もしないあるがまま(1)	
	自立(家族に迷惑をかけない)	反面教師の高齢者(2)	
		自分の事は自分で出来るようにしていく(10)	
		家族や子供に迷惑をかけない(4)妻や家族がいてくれる事(9)	
		人に迷惑をかけない(2)	
		健康・元気でいたい(17)	
		モデルとする高齢者(5)	
		生きる信念(5)	
		死の事(6)	
		好きなことをする(5)	
		苦労したくない(1)	

＊研究1の分析に用いた104の元ラベルとインタビューで発言された10の「わからない」「考えてない」の元ラベルを加え質問項目を作成するためKJ法による分析を行った。18の表札と2つの元ラベルでまとまった。

表4　質問項目の作成結果

構成概念	項目	引用
挑戦と活動	新しい事を始めたい	児玉ら（1995）
	いろいろなことをやってみたい	
	変化のある暮らしをしたい	
	人間関係を広げたい	
	社会のために尽くしたい	
望む老後像は持たない	長生きしたくない	作成項目
	老後は特に考えていない	
	なすがまま敢えて努力はしない	
自立(家族に迷惑をかけない)	なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい	
	自分の事は自分でするようにしていきたい	
	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	
	わがままな高齢者にならないようにしいていきたい	
	健康でいるように努力したい	

＊「挑戦と活動」「望む老後像は持たない」「自立（家族に迷惑をかけない）」の構成概念の項目で実際に研究1で語られた項目のみを選択した。

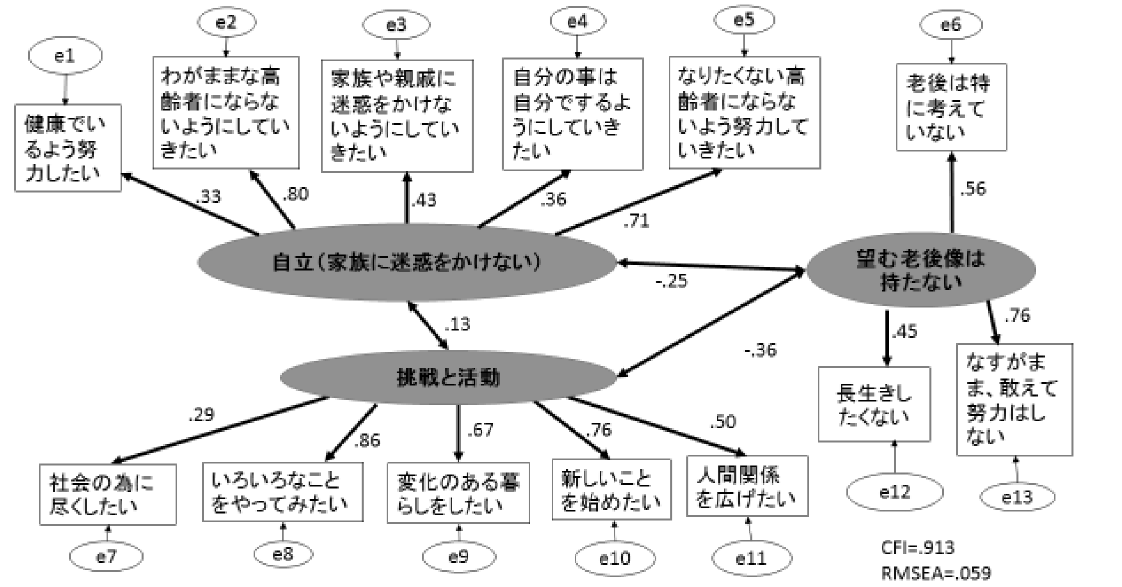


図24 望む老後像の質問項目13項目 共分散構造分析結果

24

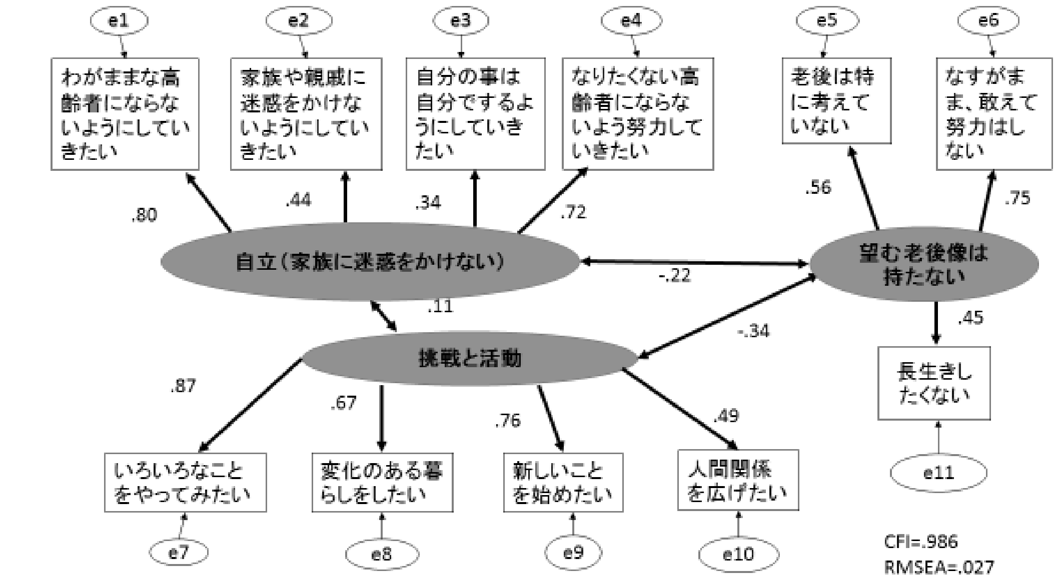


図25　望む老後像の質問項目11項目　共分散構造分析結果　25

表5 挑戦と活動　因子分析結果	
	因子
	1
いろいろなことをやってみたい	.856
変化のある暮らしをしたい	.699
新しいことを始めたい	.733
人間関係を広げたい	.517
因子抽出法: 主因子法	
a. 1 個の因子が抽出されました。10 回の反復が必要です。	

表6　迷惑をかけたくない　因子分析結果

	因子
	1
わがままな高齢者にならないようにしていきたい	.776
家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	.477
自分の事は自分でするようにしていきたい	.404
なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい	.674

因子抽出法: 主因子法

a. 1 個の因子が抽出されました。12 回の反復が必要です。

表7　放棄　因子分析結果

	因子
	1
なすがまま、敢えて努力はしない	.615
老後は特に考えていない	.679
長生きしたくない	.479

因子抽出法: 主因子法

a. 1 個の因子が抽出されました。12 回の反復が必要です。

表8　望む老後像のヒエラルヒーに関するスケログラム分析結果　123

ID	変化のある暮らしをしたい	人間関係を広げたい	新しいことを始めたい	いろいろなことをやってみたい	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	なりたくない高齢者にならないようにしていきたい	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	自分の事は自分でするようにしていきたい
1	1	1	1	0	1	1	1	1
2	0	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	0	1	1	0	0	0	1
6	1	1	1	1	1	1	1	1
7	1	0	1	1	1	0	1	1
8	1	1	1	1	0	1	0	1
9	1	1	1	1	1	1	1	1
10	1	0	1	1	1	1	1	1
11	0	0	0	0	1	1	1	1
12	0	1	1	0	1	1	1	1
13	0	0	1	1	1	1	1	1
14	1	1	1	1	1	1	1	1
15	0	1	1	1	1	0	1	1
16	0	1	0	0	1	1	1	1
17	1	0	1	1	1	1	1	1
18	1	1	1	1	1	1	1	1
19	1	1	1	1	1	1	1	1
20	1	1	1	1	1	0	1	1
21	0	1	0	0	1	1	1	1
22	1	0	1	1	1	1	1	1
23	0	0	1	1	1	1	1	0
24	1	1	1	1	1	1	1	1
25	1	1	1	1	1	1	1	1
26	1	0	1	1	1	1	1	1
27	1	1	1	1	0	0	1	1
28	1	1	0	1	1	1	1	1
29	1	1	1	1	0	1	1	1
30	1	0	1	1	1	0	1	1
31	0	0	1	1	0	1	1	1
32	1	1	1	1	1	1	1	1
33	0	1	1	1	1	1	1	1
34	0	0	0	1	1	1	1	1
35	0	0	1	0	1	1	1	1
36	1	1	1	1	1	1	1	1
37	0	0	0	0	1	0	1	1
38	0	0	1	1	1	1	1	1
39	1	1	1	1	1	1	1	1
40	1	1	1	1	1	1	0	1
41	0	1	0	0	1	1	1	1
42	0	1	1	1	1	1	1	1
43	1	1	1	1	1	1	1	1
44	0	0	0	0	1	1	1	1
45	0	0	1	1	1	1	1	1
46	1	0	0	1	1	1	1	1
47	1	1	1	1	1	1	1	1
48	0	1	1	0	0	1	1	1
49	0	0	0	0	1	1	1	1
50	1	1	1	1	1	1	1	1
51	0	1	1	1	1	1	1	1
52	1	1	1	1	1	1	1	1
53	1	1	1	1	1	1	1	0
54	1	1	1	1	1	1	1	1
55	1	1	0	1	1	1	1	1
56	1	0	0	1	1	1	1	1
57	1	1	1	1	0	1	0	1
58	0	1	1	1	1	1	1	1
59	0	0	1	1	1	1	1	1
60	1	1	1	1	1	1	0	1
61	1	0	1	1	1	1	1	1
62	1	1	1	1	1	1	1	1
63	0	0	1	1	1	1	1	1
64	1	1	1	1	1	1	1	1
65	0	1	1	1	1	1	1	1
66	0	0	0	0	0	0	1	1
67	0	1	0	0	1	1	1	1
68	1	1	1	1	1	1	1	1
69	0	1	1	1	1	1	1	1
70	0	1	1	1	1	1	1	1
71	0	0	1	0	1	0	1	1
72	0	0	1	1	1	1	1	1
73	0	0	1	1	1	1	1	1
74	0	0	0	0	0	0	1	1
76	0	0	1	1	1	1	0	1
77	1	1	0	1	1	1	1	1
78	1	1	0	0	1	1	1	1
79	0	0	1	0	1	1	1	1
80	1	1	1	1	1	1	1	1
81	1	1	1	1	1	1	1	1
82	1	1	1	1	1	1	1	1
83	0	1	1	1	1	1	1	1
84	1	0	1	1	1	1	1	1
85	1	1	1	1	1	1	0	0
86	0	0	0	0	1	1	1	1
87	1	0	0	1	1	1	1	1
88	0	0	0	1	1	1	0	1
89	0	1	1	1	1	1	1	1
90	1	1	1	1	1	1	1	1
91	0	0	1	1	1	1	1	1
92	0	0	0	1	1	1	1	1
93	1	1	1	1	1	1	1	1
94	0	1	1	1	1	1	1	1
95	0	0	0	1	1	1	1	1
96	0	1	1	1	0	1	1	1
97	1	0	1	1	1	1	1	1
98	0	1	0	1	1	1	1	1
99	0	0	0	0	1	1	1	1
100	0	0	1	1	1	1	1	0
101	1	1	1	1	1	1	1	1
102	0	1	1	1	1	1	1	1
103	1	1	1	1	0	1	1	1
104	0	0	0	1	1	1	1	1
105	1	1	1	1	1	1	1	1
106	0	0	0	0	1	1	1	1
107	0	0	0	0	0	0	1	1
108	0	1	1	1	1	1	1	1
109	0	0	0	0	1	1	1	1
110	0	1	0	1	1	1	1	1
111	1	1	1	1	1	1	1	1
112	1	0	1	1	1	1	0	1
113	0	0	0	0	1	1	1	1
114	1	1	1	1	1	1	1	1
115	1	1	1	1	1	1	1	1
116	1	1	1	1	1	1	1	1
117	1	1	1	1	1	1	1	1
118	0	0	1	1	1	1	1	1
119	1	0	1	1	1	1	1	1
120	1	1	1	1	1	1	1	1
121	0	0	1	1	1	1	1	1
122	1	0	1	1	1	1	1	1
123	1	0	1	1	1	1	1	1
124	0	1	1	1	1	1	1	1

＊ID75は欠損値があったため分析から削除した

表9 望む老後像に関する質問項目 回答結果表								n=123
項目	変化のある暮らしをしたい	人間関係を広げたい	新しいことを始めたい	いろいろなことをやってみたい	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	なりたくない高齢者にならないようにしていきたい	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	自分の事は自分でするようにしていきたい
有	65	72	93	100	111	112	114	119
無	58	51	30	23	12	11	9	4

表10 望む老後像に関する質問項目 エラー結果表									
項目	変化のある暮らしをしたい	人間関係を広げたい	新しいことを始めたい	いろいろなことをやってみたい	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	なりたくない高齢者にならないようにしていきたい	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	自分の事は自分でするようにしていきたい	計
エラー数		15	8	6	7	6	6	3	51

表11　望む老後像に関する質問項目　回答結果　n=123

項目	老後は特に考えていない	なすがまま、敢えて努力はしない	長生きしたくない	変化のある暮らしをしたい	人間関係を広げたい	新しいことを始めたい	いろいろなことをやってみたい	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	なりたくない高齢者にならないようにしていきたい	自分の事は自分でするようにしていきたい
平均値	2.16	2.38	2.87	3.46	3.69	3.96	4.17	4.49	4.52	4.54	4.71
標準偏差	1.039	1.094	1.140	1.100	0.966	0.914	0.908	0.749	0.631	0.705	0.522
分散	1.079	1.197	1.300	1.210	0.933	0.836	0.825	0.561	0.398	0.497	0.273
歪度	0.687	0.561	-0.110	-0.287	-0.375	-0.893	-1.072	-1.447	-0.982	-1.489	-1.610
標準誤差	0.217	0.217	0.217	0.217	0.217	0.217	0.217	0.217	0.217	0.218	0.217
尖度	-0.122	-0.375	-0.632	-0.801	-0.305	0.796	0.806	1.602	-0.082	1.790	1.737
標準誤差	0.431	0.431	0.431	0.431	0.431	0.431	0.431	0.431	0.431	0.433	0.431

表12 各尺度の特徴：平均値・分散・尖度・歪度

		挑戦と活動	迷惑をかけたくない	放棄
度数	有効	124	123	124
	欠損値	0	1	0
平均値		15.27	18.28	7.41
標準偏差		3.051	1.844	2.456
分散		9.306	3.402	6.033
歪度		-0.541	-0.834	0.400
歪度の標準誤差		0.217	0.218	0.217
尖度		-0.140	-0.316	-0.037
尖度の標準誤差		0.431	0.433	0.431

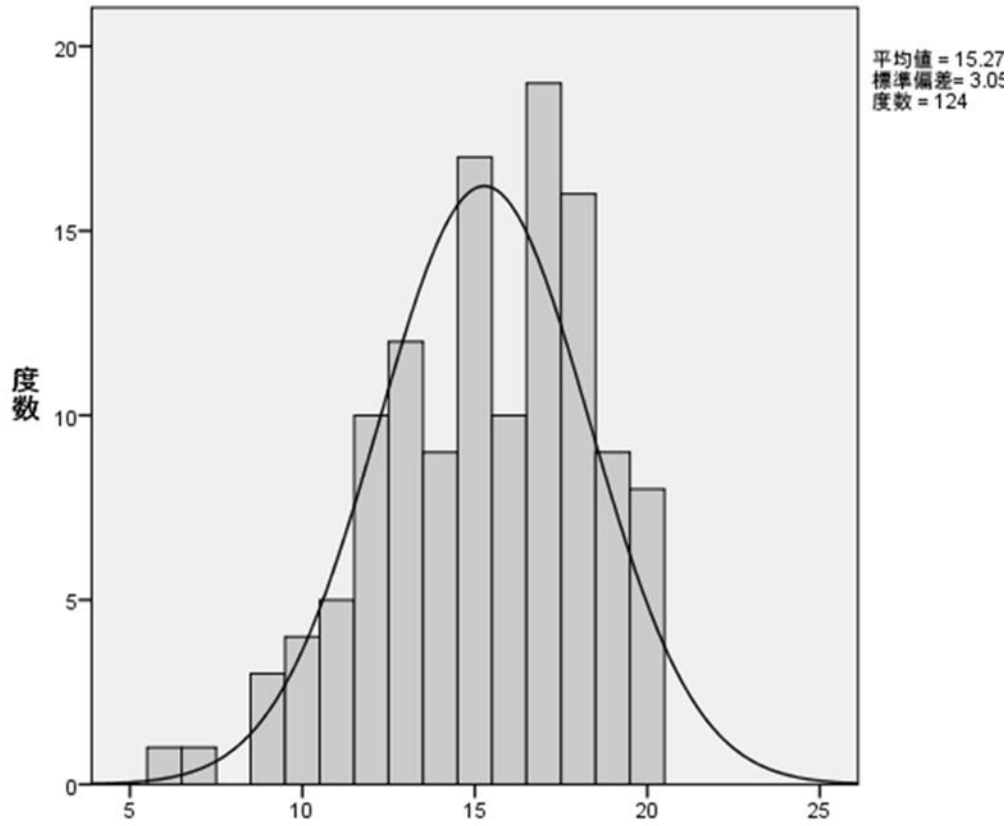


図 26　挑戦と活動　分布

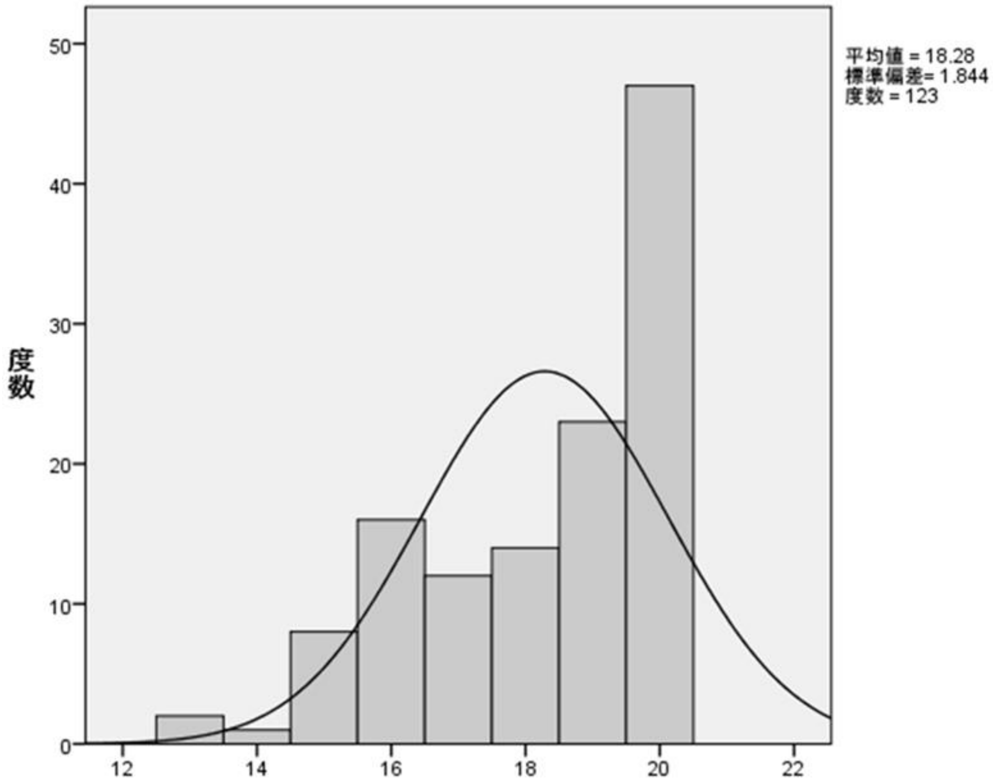


図 27　迷惑をかけたくない　分布

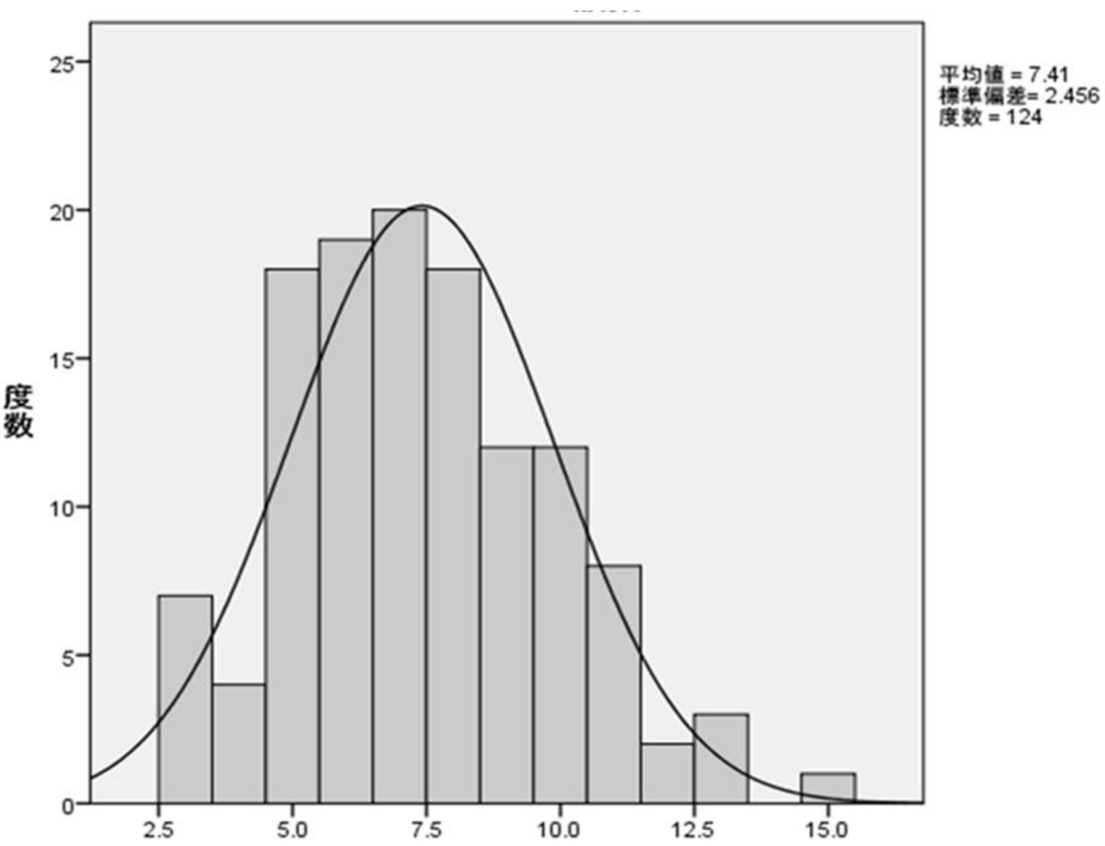


図 28　放棄　分布

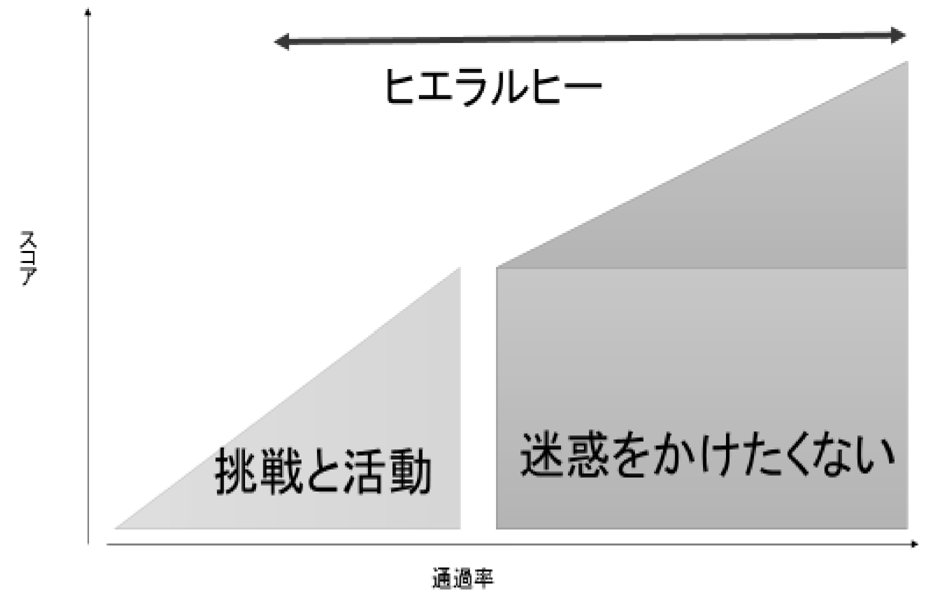


図29 スケローグラム分析結果 イメージ図

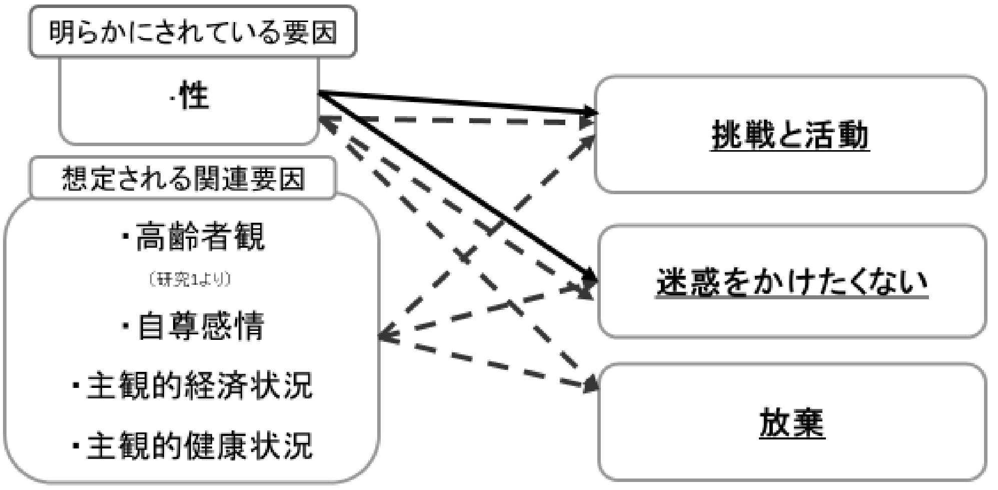

明らかにされている要因
･性
想定される関連要因
・高齢者観
（研究1より）
・自尊感情
・主観的経済状況
・主観的健康状況
挑戦と活動
迷惑をかけたくない
放棄
明らかにされている
本研究で試みる

図30　分析モデル

表13　Fraboniエイジズム尺度日本語短縮版　因子分析結果

	成分		
	1	2	3
多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	.762	.253	-.064
多くの高齢者は過去に生きている	.756	.221	.082
高齢者と会うと、ときどき目を合わせないようにしてしまう	.660	.125	.347
もし、招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	.639	-.014	.339
多くの高齢者はけちでお金を貯めている	.564	.432	-.127
ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラ	.425	.235	.301
ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	.195	.748	.191
高齢者は、若い人の集まりによばれたときには感謝すべきだ	.142	.677	-.177
高齢者はだれにも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	.235	.670	.278
できれば高齢者と一緒に住みたくない	.016	.616	.524
高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	.342	.522	.244
高齢者との付き合いは結構楽しい（逆転項目）	.007	-.017	.688
個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	.373	.254	.658
高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	.492	.293	.535
因子間相関	.680	.588	.438
	.099	-.666	.739
	-.726	.460	.511

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表14 自尊感情尺度　因子分析結果	
	成分
	1
私は自分が、だめな人間だと思う＊	.761
自分を失敗者だと思いがちである＊	.718
私は自分に対して、前向きの態度をとっている	.718
私は自分には見どころがあると思う	.716
私は役立たずだと感じる＊	.715
私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う	.697
私には得意に思うことはない＊	.672
私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる	.664
もう少し自分を尊敬できたらと思う＊	.635
私は自分に満足している	.564
因子抽出法: 主成分分析	
a. 1 個の成分が抽出されました	

表15　変数間の相関分析結果								
	挑戦と活動	迷惑をかけたくない	放棄	性別	経済状況	健康状況	FSA	自尊感情
挑戦と活動								
迷惑をかけたくない	0.064							
放棄	-.288**	-0.138						
性別	-0.078	0.029	.206*					
経済状況	-0.020	0.002	-0.055	0.076				
健康状況	0.080	0.011	0.004	0.057	-0.013			
FSA	-0.167	-0.073	.265**	-0.076	0.030	-0.058		
自尊感情	0.032	-0.105	-.312**	0.001	.372**	-.187*	-0.127	

**p<0.01　*p<0.05

表16　基本属性			n=124
		人数	パーセント
性別	男性	71	57.3
	女性	52	41.9
	欠損値	1	.8
主観的経済状況	まったくゆとりがない	16	12.9
	あまりゆとりがない	31	25.0
	標準的である	47	37.9
	ややゆとりがある	21	16.9
	ゆとりがある	8	6.5
	欠損値	1	.8
主観的健康状況	良い	28	22.6
	まあ良い	37	29.8
	普通	36	29.0
	あまり良くない	21	16.9
	良くない	1	.8
	欠損値	1	.8

表17　放棄の回帰分析結果

	標準化偏回帰係数β	t 値	t検定の有意確率
FSA	.235	2.724	.007
自尊感情	-.295	-3.144	.002
健康状況	-.052	-.598	.551
経済状況	.028	.302	.763
性別	.220	2.585	.011

※強制投入法による計算で、決定係数は.192、決定係数の f 検定は1%水準で有意

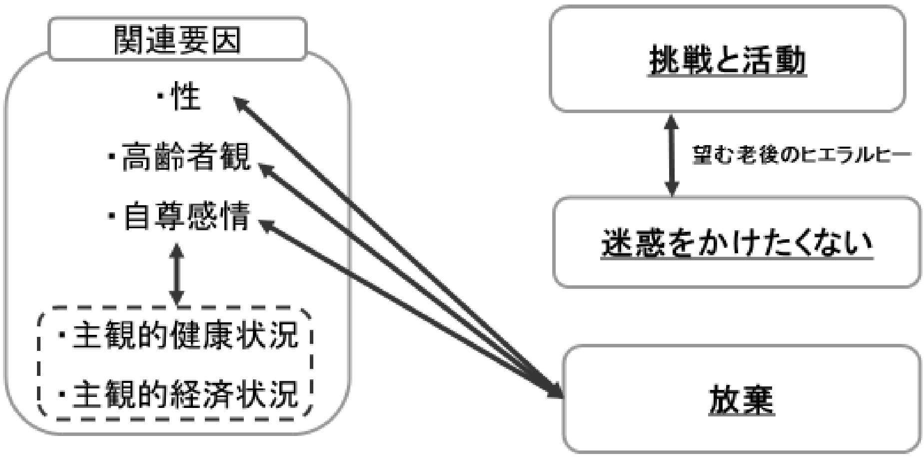


図31 分析モデルの結果

資料

調査票

Q1、　ご自身の望ましい高齢期を考え、項目ごとに、あなたの考えにあてはまると思う数字に〇をして下さい。回答は、「5 まったくそう思う」「4 少しそう思う」「3 どちらともいえない」「2 あまりそう思わない」「1 全然そう思わない」でお答え下さい。（1 つの質問に〇は 1 つ）

		まったくそう思う	少しそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全然そう思わない
1	つらいことは避けるようにしたい	5	4	3	2	1
2	周囲に合わせて行動したい	5	4	3	2	1
3	いろいろなことをやってみたい	5	4	3	2	1
4	変化のある暮らしをしたい	5	4	3	2	1
5	何事につけ人の意見に従うようにしたい	5	4	3	2	1
6	気の合った仲間とだけ付き合いたい	5	4	3	2	1
7	新しいことを始めたい	5	4	3	2	1
8	努力してがんばるような生き方をしたい	5	4	3	2	1
9	若い人とできるだけ付き合うようにしたい	5	4	3	2	1
10	社会の為に尽くしたい	5	4	3	2	1
11	近所付き合いのわずらわしさを避けたい	5	4	3	2	1
12	人間関係を広げたい	5	4	3	2	1
13	人間関係のわずらわしさを避けたい	5	4	3	2	1
14	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	5	4	3	2	1
15	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	5	4	3	2	1
16	長生きしたくない	5	4	3	2	1
17	家族や親戚を頼りにしていきたい	5	4	3	2	1
18	自分の事は自分でするようにしていきたい	5	4	3	2	1
19	自分の好みを押し通していきたい	5	4	3	2	1
20	なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい	5	4	3	2	1

21	老後の準備はしていきたい	5	4	3	2	1
22	健康でいるよう努力していきたい	5	4	3	2	1
23	生活に関わる事は、出来なくても問題ない	5	4	3	2	1
24	老後は特に考えていない	5	4	3	2	1
25	なりたい高齢者に向かって努力していきたい	5	4	3	2	1
26	なすがまま、敢えて努力はしない	5	4	3	2	1

Q2、 次は質問 1～13 はご自身が実際にどのような生活をおくるかを考え、質問 14～26 はご自身の実際の高齢期に向かっていく過程を考え、項目ごとに、あなたの考えにあてはまると思う数字に○をして下さい。回答は、「5 まったくそう思う」「4 少しそう思う」「3 どちらともいえない」「2 あまりそう思わない」「1　全然そう思わない」でお答え下さい。（1 つの質問に○は 1 つ）

	ご自身の実際の高齢期を考えてお答え下さい	まったくそう思う	少しそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全然そう思わない
1	つらいことは避けるような生活	5	4	3	2	1
2	周囲に合わせた行動	5	4	3	2	1
3	いろいろなことをやってみる	5	4	3	2	1
4	変化のある暮らし	5	4	3	2	1
5	何事につけ人の意見に従う	5	4	3	2	1
6	気の合った仲間とだけ付き合う	5	4	3	2	1
7	新しいことを始める	5	4	3	2	1
8	努力してがんばるような生き方	5	4	3	2	1
9	若い人とできるだけ付き合う	5	4	3	2	1
10	社会の為に尽くす	5	4	3	2	1
11	近所付き合いのわずらわしさを避ける	5	4	3	2	1
12	人間関係を広げる	5	4	3	2	1

13	人間関係のわずらわしさを避ける	5	4	3	2	1
	以下は、ご自身の実際の高齢期に向かっていく過程を考えてお答え下さい					
14	家族や親戚に迷惑をかけないようにしていきたい	5	4	3	2	1
15	わがままな高齢者にならないようにしていきたい	5	4	3	2	1
16	長生きしたくない	5	4	3	2	1
17	家族や親戚を頼りにしていきたい	5	4	3	2	1
18	自分の事は自分でするようにしていきたい	5	4	3	2	1
19	自分の好みを押し通していきたい	5	4	3	2	1
20	なりたくない高齢者にならないよう努力していきたい	5	4	3	2	1
21	老後の準備はしていきたい	5	4	3	2	1
22	健康でいるよう努力していきたい	5	4	3	2	1
23	生活に関わる事は、出来なくても問題ない	5	4	3	2	1
24	老後は特に考えていない	5	4	3	2	1
25	なりたい高齢者に向かって努力していきたい	5	4	3	2	1
26	なすがまま、敢えて努力はしない	5	4	3	2	1

Q3、 次の質問項目は、あなたが希望や充実感をどれくらいもっているのか、お聞きするためのものです。項目ごとにあてはまる数字を選んで、○をして下さい。回答は「5 あてはまる」「4 どちらかといえばあてはまる」「3 どちらともいえない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「1 あてはまらない」でお答え下さい。

（1 つの質問に○は 1 つ）

		あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1	私には、だいたいの将来計画がある	5	4	3	2	1

2	将来のためを考えて今から準備していることがある	5	4	3	2	1
3	私には将来の目標がある	5	4	3	2	1
4	私の将来は漠然としていてつかみどころがない	5	4	3	2	1
5	将来のことはあまり考えたくない	5	4	3	2	1
6	私の将来には希望がもてる	5	4	3	2	1
7	10 年後私はどうなっていくのかよくわからない	5	4	3	2	1
8	自分の将来は自分できりひらく自信がある	5	4	3	2	1
9	私には未来がないような気がする	5	4	3	2	1
10	毎日の生活が充実している	5	4	3	2	1
11	今の生活に満足している	5	4	3	2	1
12	毎日が同じことのくり返しで退屈だ	5	4	3	2	1
13	毎日がなんとなく過ぎていく	5	4	3	2	1
14	今の自分は本当の自分でないような気がする	5	4	3	2	1

Q4、 ご自身について、お聞きします。項目ごとに、あなたの状態に最も良くあてはまると思う数字に〇をして下さい。回答は、「4 はい」「3　どちらかといえばはい」「2 どちらかといえばいいえ」「1 いいえ」でお答え下さい。（1 つの質問に〇は 1 つ）

		はい	どちらかといえばはい	どちらかといえばいいえ	いいえ
1	私は自分に満足している	4	3	2	1
2	私は自分がだめな人間だと思う	4	3	2	1
3	私は自分には見どころがあると思う	4	3	2	1
4	私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる	4	3	2	1
5	私には得意に思うことがない	4	3	2	1
6	私は役立たずだと感じる	4	3	2	1

7	私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う	4	3	2	1
8	もう少し自分を尊敬できたらと思う	4	3	2	1
9	自分を失敗者だと思いがちである	4	3	2	1
10	私は自分に対して、前向きの態度をとっている	4	3	2	1

Q5、　高齢者についての質問があります。最も あてはまると思う数字に○をして下さい。回答は「5 そう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらともいえない」「2 あまりそう思わない」「1 そう思わない」でお答え下さい。

（1 つの質問に○は 1 つ）

		そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
1	多くの高齢者はけちでお金を貯めている	5	4	3	2	1
2	多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	5	4	3	2	1
3	多くの高齢者は過去に生きている	5	4	3	2	1
4	高齢者と会うと、ときどき目を合わせないようにしてしまう	5	4	3	2	1
5	高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	5	4	3	2	1
6	高齢者は、若い人の集まりによばれたときには感謝すべきだ	5	4	3	2	1
7	もし、招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	5	4	3	2	1
8	個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	5	4	3	2	1
9	高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	5	4	3	2	1
10	ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	5	4	3	2	1
11	高齢者はだれにも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	5	4	3	2	1
12	高齢者との付き合いは結構楽しい	5	4	3	2	1
13	できれば高齢者と一緒に住みたくない	5	4	3	2	1

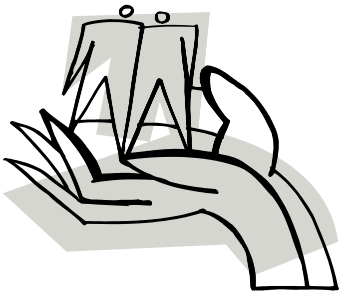
14	ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	5	4	3	2	1

Q6、 現在の心と体についての質問があります。この数年について、あてはまると思う数字に○をして下さい。回答は「5 そう思う」「4 まあそう思う」「3 どちらともいえない」「2 あまりそう思わない」「1 そう思わない」でお答え下さい。(1 つの質問に○は 1 つ)

		そう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
1	疲れやすくなった	5	4	3	2	1
2	自分の外見は以前と変わっていない	5	4	3	2	1
3	物覚えが悪くなった	5	4	3	2	1
4	何かに集中すると時を忘れてしまう	5	4	3	2	1
5	新しいものへの興味は尽きない	5	4	3	2	1
6	気力は以前のままだ	5	4	3	2	1
7	社会の変化についていけている自信がある	5	4	3	2	1
8	若い人とのずれを感じる	5	4	3	2	1
9	運動能力が低下した	5	4	3	2	1
10	物事を理解する力は以前のままである	5	4	3	2	1
11	耳や目が悪くなった	5	4	3	2	1
12	風邪や二日酔いが治りにくくなった	5	4	3	2	1

Q7、 あなたの年齢を教えて下さい。

		歳



Q8、　あなたの性別について、どちらかに○をお願いします。

1. 男性
2. 女性

Q9、　あなたの現在の経済状況に当てはまる数字に○をお願いします。
（○は１つ）

1. まったくゆとりがない
2. あまりゆとりがない
3. 標準的である
4. ややゆとりがある
5. ゆとりがある

Q10、　あなたの現在の健康状況に当てはまる数字に○をお願いいたします。
（○は１つ）

1. 良い
2. まあ良い
3. 普通
4. あまり良くない
5. 良くない

以上で終わりです。
多くの質問にお答えいただき、心より感謝申し上げます。
アンケート用紙は、別添えの封筒に封入し、返送をお
願いいたします。
＊尚、返信用の封筒には、個人情報保護のため、何も
記入せず、12 月 10 日位までに、郵便ポストへ投
函願います。